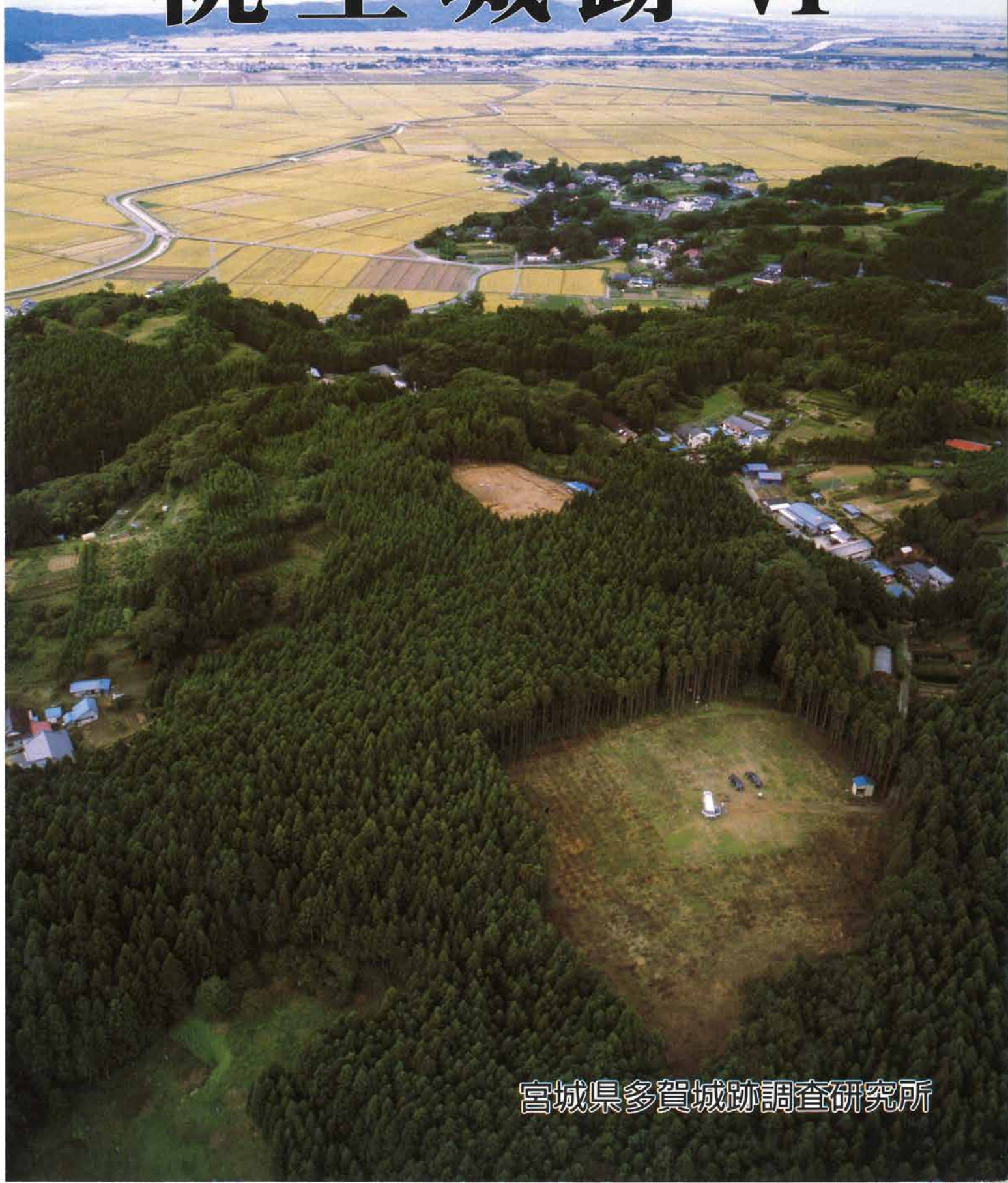


多賀城関連遺跡発掘調査報告書第23冊

桃生城跡 VI



宮城県多賀城跡調査研究所

序 文

多賀城関連遺跡発掘調査事業は、今年で第5次5ヶ年計画の4年次にあたり、宮城県桃生郡河北町・桃生町に所在する桃生城跡を発掘調査した。桃生城跡の通算第6次調査にあたる。

これまでの調査で、桃生城跡の中央部には築地塀で囲まれた南北約72m・東西約66mの規模をもつ政庁があり、内部に正殿・後殿・東脇殿・西脇殿が整然と配置されているのが分かってきた。これらはすべて瓦葺きの掘立式建物である。この築地塀跡と建物跡は火災にあっており、宝亀5(774)年の海道の蝦夷の蜂起で桃生城が攻略された時に炎上したものと推定されるが、再建されていない。また、桃生城の全体の規模は、東西約800m×南北約650mで、矩形に近い不整形となっている。外郭施設は、場所によって構造が異なり、築地塀や材木塀、土塁などから構成されている。また南辺西端部のように、材木塀の外側に大溝が伴う場所も発見されている。

このように、桃生城は中心施設である政庁とその建物群、城全体の規模や外郭施設の構造などが明らかになっている。あとは外郭線と政庁地区の間にどのような施設があったかが問題になろう。

今年の調査地は、政庁の西側にある平坦地を選定した。政庁は炎上し、再建されていないので、西隣のこの地に政庁が再建されていたのではないか、あるいは政庁とは別な建物が存在していたのかなどを明らかにするのが目的であった。

発掘調査の結果、掘立式建物跡2棟、竪穴住居跡3棟、土器などが捨てられた土壌1基などが発見された。掘立式建物跡の存在はこの地区が実務を取り扱った官衙(役所)があったことを示すものであろう。おそらく周囲を広く調査すれば官衙としての建物配置が判明するものと予想された。また、竪穴住居跡からは沢山の土器や少数の砥石・鉄製品が出土した。この竪穴住居跡は、土器の特徴から8世紀中頃のもので、工房ないし兵士に関わるものと考えられた。

遺構の数は少なかったが、竪穴住居跡出土の土器も豊富であり、本報告書が東北地方の古代史に役立つことを期待している。

最後になりましたが、調査にあたり、多賀城跡調査研究指導委員会の諸先生や文化庁からさまざまなご指導を頂きました。また、共催して頂いた河北地区教育委員会、桃生町教育委員会、そして快く調査地を提供して下さった地権者の皆様、調査に参加し作業をして頂いた地元の皆様に大変お世話になりました。あわせて御礼申し上げます。

平成10年3月

宮城県多賀城跡調査研究所
所 長 藤 沼 邦 彦

目 次

I. 調査要項	1
II. 多賀城関連遺跡の調査計画	1
III. これまでの調査の概要	4
IV. 第6次調査の目的と経過	6
V. 基本層序	8
VI. 発見された遺構と遺物	8
(1) 掘立式建物跡	8
(2) 竪穴住居跡と溝	11
(3) その他の遺構	22
(4) 表土出土の遺物	24
VII. 考察	27
写真図版	

例 言

1. 本遺跡の測量については、第X系座標 $X = -163,020.000\text{m}$ 、 $Y = 39,000.000\text{m}$ 、 $H = 65.440\text{m}$ を原点とし、発掘基準線の北はこの座標北と一致する。本書で用いた方位はこの基準線をもとに計測したものである。
2. 高台坏・瓦の分類基準は第3次調査の報告書『桃生城跡Ⅲ 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第20冊』（宮城県多賀城跡調査研究所：1995）による。
3. 土色については『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄：1976）を参照した。
4. 本書の作成にあたっては、藤沼邦彦、丹羽茂、阿部恵、佐藤和彦、柳澤和明、白崎恵介の討議・検討をもとに、阿部恵・佐藤和彦が執筆・編集した。

I. 調査要項

1. 遺跡名 桃生城跡
2. 所在地 宮城県桃生郡河北町飯野字中山・字碓畑・字高屋敷、同郡桃生町太田字沢入畑
3. 調査主体 宮城県教育委員会（教育長 遠藤 嘉彬）
4. 調査共催 河北地区教育委員会（教育長 松澤 俊男）
桃生町教育委員会（教育長 遠山 博久）
5. 調査指導 多賀城跡調査研究指導委員会（委員長 芹澤 長介）
6. 調査担当 宮城県多賀城跡調査研究所長 藤沼 邦彦
7. 調査期間 平成9年8月1日～10月20日
8. 調査面積 約800㎡
9. 地元協力者 地権者：佐藤栄一、佐藤勝昭、小出勝治、伊藤幸一、佐々木正二
区 長：小出正夫
作業員：伊藤良一、小出正夫、佐々木清美、小出新吾、伊藤幸一、岡田正七、
佐々木市子、小出いく子、高石とよ子、千葉勝子、阿部とみ子、
三浦まつよ、伊藤ふみ子、伊藤やゑ子、小出京子
10. 整理参加者 阿部笑子、千葉朱実、佐藤貴子、小野郁子、亀井桐子、今野健一郎、佐藤友子、
小幡悦子、鈴木文子、高橋幹子、鈴木敬子
11. 体験学習 桃生郡河北町立大谷地小学校5年児童（9月2日）・6年児童（9月3日）

II. 多賀城関連遺跡の調査計画

当研究所では、特別史跡多賀城跡附寺跡の調査研究と並行して、宮城県内に所在する多賀城と密接に関連する城柵・官衙遺跡や生産遺跡についての調査研究を、昭和49年度以来継続的に実施してきている。この調査研究事業は、古代を通して陸奥・出羽両国を中央政府と密接な連携のもとに支配する中枢的な役割を果たした多賀城を、多角的な視点から解明するとともに、これらの諸遺跡を保護・保存することを目的としたものである。

調査研究は、多賀城跡調査研究指導委員会の指導に基づき5ヵ年計画を立て、その年次計画に従って実施している。

第1次5ヵ年計画(昭和49～53年)では49・50両年に桃生郡河北町と桃生町にまたがって所在する桃生城跡を、51～53年には栗原郡築館町に所在する伊治城跡を調査した。第2次5ヵ年計画(昭和54～58年)では54年に伊治城跡を、55～58年には古川市に所在する名生館官衙遺跡を調査した。第3次5ヵ年計画(昭和59～63年)では59・60年に名生館官衙遺跡を、60年には玉造郡岩出山町合戦原窯跡群を併せ

て調査し、61～63年には加美郡宮崎町に所在する東山遺跡を調査した。第4次5ヵ年計画(平成元～5年)では元～4年に東山遺跡を、5年には志田郡三本木町下伊場野窯跡群を調査した。

第5次5ヵ年計画(平成6～10年)は、平成5年6月に開催した第29回多賀城跡調査研究指導委員会で承認を得た。初年度の平成6年度は、桃生城跡の政庁地区と外郭北辺地区を対象とする第3次調査を実施し、併せて地形図(1/1,000)を作成した。その結果、政庁の建物配置と変遷、外郭北辺の区画施設の規模と構造を把握することができた。2年次の7年度は、政庁南東隅と外郭東辺・北西隅を対象に第4次調査を行い、政庁の規模と構造、また外郭線の北半の規模と構造をほぼ確定することができた。3年次に当たる8年度は、外郭東辺2ヵ所と南辺1ヵ所を対象に第5次調査を行い、外郭南半の規模と構造をほぼ確定し、桃生城の規模が東西約800m、南北約650mであることが判明した。

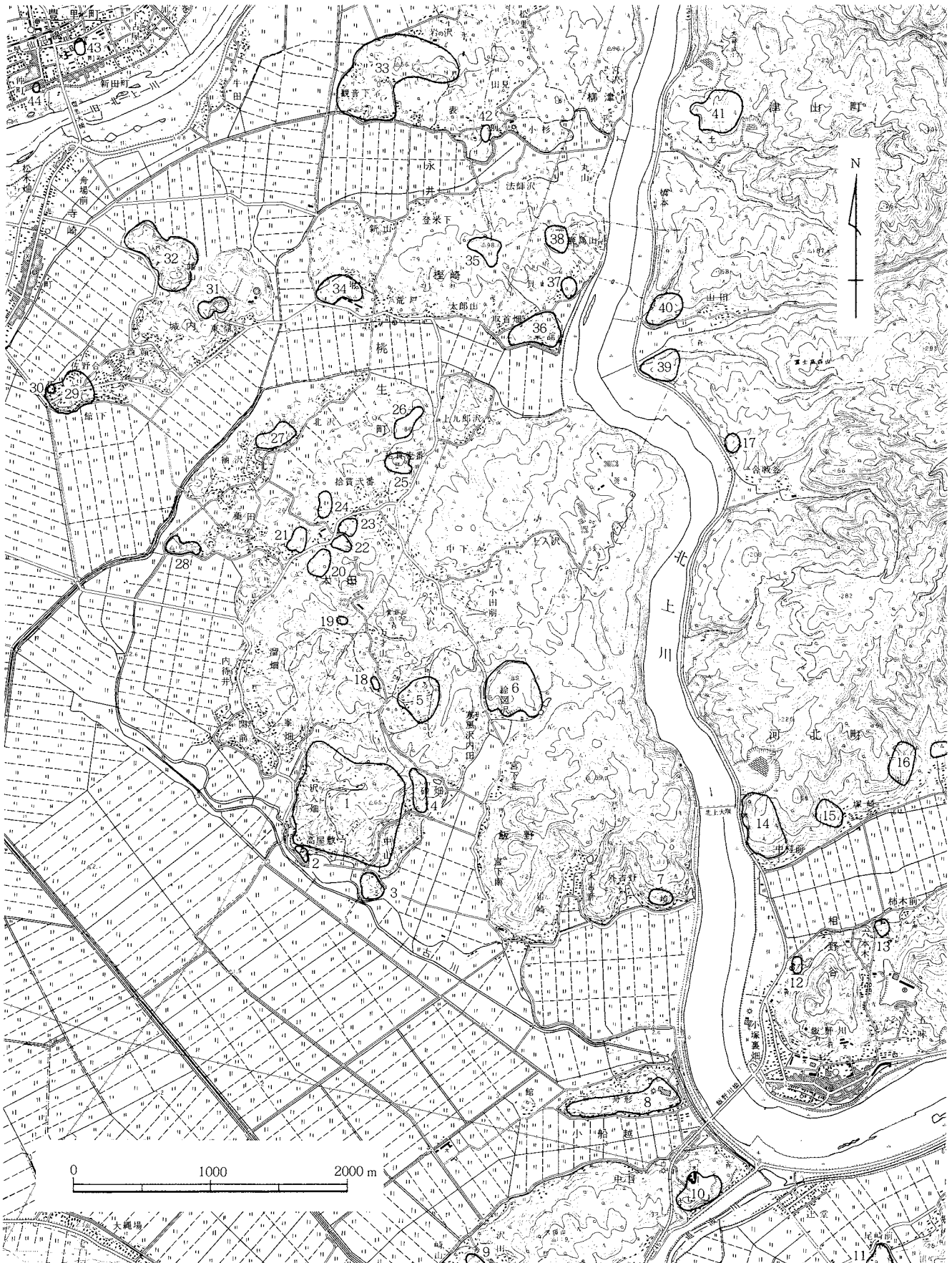
そこで、第5次5ヵ年計画の4年次に当たる平成9年度は、平成8年9月に開催した第7回多賀城跡調査研究現地指導委員会で修正案の承認を得た第5次5ヵ年計画(表1)に基づき、政庁西側の丘陵の平坦地を対象とする、桃生城跡の第6次調査を実施した。総事業費は17,000千円(国庫補助50%)であった。

年 度	遺 跡 名	事 業	内 容
6年度	桃 生 城 跡	第 3 次 調 査	政庁の建物配置、北辺外郭線の確認
7年度	桃 生 城 跡	第 4 次 調 査	政庁南東隅、東辺・北辺北西隅外郭線の確認
8年度	桃 生 城 跡	第 5 次 調 査	東辺・南辺外郭線の確認
9年度	桃 生 城 跡	第 6 次 調 査	実務官衙の確認
10年度	桃 生 城 跡	第 7 次 調 査	実務官衙の確認

表1 多賀城関連遺跡調査第5次5ヵ年計画(平成8年9月修正)

河北町				桃生町							
	遺 跡 名	種 別	時 代		遺 跡 名	種 別	時 代				
1	桃 生 城 跡	城 柵	古 代	18	万歳山A遺跡	包含地	縄 文	34	壇ノ森館跡	城 館 中 世	
2	高屋敷遺跡	包含地	古 代	19	万歳山B遺跡	包含地	奈良・平安	35	黄竜淵館跡	城 館 中 世	
3	飯野館跡	城 館	中 世	20	細谷B遺跡	包含地	奈良・平安	36	檜崎館跡	城 館 中 世	
4	新田東遺跡	包含地	古 代	21	太田窯跡	窯 跡	奈 良	37	檜崎貝塚	貝 塚 縄文早・中	
5	問答山遺跡	包含地	古 代	22	細谷遺跡	包含地	縄文晩、古代	38	陣ヶ峯館跡	城 館 中 世	
6	赤間館跡	城 館	中 世	23	宗全山遺跡	包含地	古 代	39	山田圃古墳	古 墳 古 墳 後	
7	外吉野遺跡	包含地	古 代	24	拾貫老番遺跡	包含地	奈良・平安 近 世	40	山田館跡 (館山城)	城 館 包含地 古代、中世	
8	後谷地遺跡	包含地	古 代	25	日高見神社遺跡	包含地	縄文、古墳後	津山町			
9	沢田山西遺跡	包含地	古 代	26	安倍館跡	城 館	中 世		遺 跡 名	種 別	時 代
10	七郎館跡	城 館 包含地	古代、中世	27	角山遺跡	包含地	奈良・平安 中・近世	41	館ヶ森館跡	城 館	中 世
11	大森城跡	城 館	中 世	28	太田館跡	城 館	中 世	42	十所貝塚	貝 塚 包含地	縄文早・中 古 代
12	成田遺跡	包含地	古 代	29	中津山城跡	城 館	中世、近世	豊里町			
13	日影貝塚	貝 塚	縄 文 前	30	白鳥古墳	円 墳	古 墳		遺 跡 名	種 別	時 代
14	山崎館跡	城 館	中 世	31	八幡館跡	城 館	中 世	43	武田屋敷跡	屋敷跡	江 戸
15	相野谷館跡	城 館	中 世	32	沢山城跡	城 館	中 世	44	御蔵場跡	蔵場跡	江 戸
16	和泉沢古墳群	円 墳	古 代	33	永井館跡	城 館	中 世				
17	合戦谷古墳	古 墳	古 墳 後								

表2 桃生城跡と周辺の遺跡



第1図 桃生城跡と周辺の遺跡

Ⅲ. これまでの調査の概要

昭和49・50年に桃生郡河北町飯野字中山の通称「長者森」で実施した第1・2次調査によって、築地塀跡や正殿・後殿と考えられる柱筋を揃えた東西5間、南北2間の掘立式建物跡2棟(SB01・SB02建物跡)などを検出し、桃生城の政庁と外郭北辺の区画施設の一部を把握した(第2図)。

第1・2次調査から20年経ち、桃生城跡の南、西に広がる水田地帯において、大規模な圃場整備事業が計画され、桃生城跡周辺地域がその客土取得用地にあてられるという危険性が生じた。そのため、桃生城跡の範囲確定が急務となり、平成6年度の高賀城関連遺跡発掘調査事業は、再び桃生城跡に戻り、第3次調査を実施した。

第3次調査では、これまでの調査や踏査による想定に基づき、政庁の建物配置と規模を確定するため、SB01・02建物跡を含めて推定政庁域のほぼ全面を調査した。また、外郭線の位置と構造を明らかにするために、外郭北東隅と想定される地点を併せて調査した(第2図)。この政庁地区の全面調査により、正殿、東・西脇殿、後殿からなる建物配置が明らかになった。それが高賀城政庁第Ⅱ期の構成と似ていること、それらの建物がいずれも掘立式で、瓦葺きであること、政庁の建物と築地塀は、宝亀5(774)年7月の海道の蝦夷の蜂起によると見られる火災によって焼失し、その後は再建されていないことがわかった。また、政庁の東辺築地の基礎を発見し、政庁の規模が約70m四方であることが判明した。桃生城跡の範囲確認を目的とした外郭北東隅推定地の調査でも、区画施設は土塁であり、北辺は600m以上となることがわかった。しかし、政庁の築地塀跡については正確な規模や構造を把握できなかった。

平成7年度の第4次調査では、政庁南東隅と外郭東辺、外郭北西隅の調査を行った。その結果、政庁南東隅で、基底幅約2.1mの南辺・東辺築地塀を検出し、政庁の規模が東西約66m、南北約72mと推定された。また、外郭線の調査では、東辺地区で2条の土塁跡とそれらに挟まれた大溝を、北西隅地区で3条の土塁跡とそれらの内側にある3条の溝を検出した。この内、最も内側の土塁は基底幅1.8mの築地塀であることが知られた。そして、これらにより、桃生城の東西の規模が約800mであることが判明した。

平成8年度の第5次調査は、これまでの調査で桃生城跡の外郭の北半部についてはほぼ明らかになったことから、外郭南半部の区画施設を明らかにするため、南辺西端1ヵ所と東辺南半2ヵ所を調査した。南辺西端地区では区画施設として材木塀と、その外側を平行して走る大溝が検出され、それが丘陵南端に位置することが知られた。また、東辺南半では、明確な区画施設は検出されなかったが、土取り穴の存在などから区画施設は尾根線上を通ることが知られた。これにより、桃生城の南北の規模が約650mで、桃生城跡の全体規模が前年までの成果と併せて東西約800m、南北約650mであることが判明した。



第2図 桃生城跡地形図

IV. 第6次調査の目的と経過

〔調査の目的〕

桃生城跡の第6次調査は、次の点を目的として実施した。

これまでの調査で、政庁の規模・区画施設・建物配置などはほぼ明らかになった。また、外郭区画施設の位置や構造が判明し、桃生城（跡）の規模がほぼ確定した。ただし、政庁以外の城内施設についてはほとんど未調査であった。そこで第6次調査は政庁西側の丘陵頂部平坦地を対象とし、城内の様子（官衙）を明らかにすることを目的とした（第2図）。

〔調査の経過〕

前述の目的のため、第6次調査は政庁地区に次ぐ広さをもつ政庁西側丘陵平坦地の東半分を調査対象地とした。5・6月にこれらの土地の所有者に今年度の調査について説明し、立木伐採と発掘調査に対する同意を得る交渉をし、6月21日に全員の同意を得られた。調査予定地は大部分が杉林、一部分が雑木林であったため、7月11日から立木の伐採を開始すると共に、伐採された材木の搬出や枝葉の片付けを順次行った。

立木の伐採作業と並行して、発掘調査に向けた抜根作業を開始し、7月29日には発掘器材を搬入して、8月1日には発掘調査の開始式を行った。

発掘調査は、調査予定地の中央部の尾根部分に南北15m、東西40m調査区を設定し、調査区の西側から手掘りで表土の除去を開始した。遺構を検出する作業に入るとすぐ、調査区の西側の北斜面でS B 96建物跡の南側柱列を検出したのを初めとして、調査区の東側を中心としてS I 99竪穴住居跡、S D 105溝、近世の墓などを検出した。S B 96建物跡および、北東隅で検出されたS I 100竪穴住居跡などの遺構が調査区外まで延びることから、その全形を把握するため適宜調査区の拡張を行った。

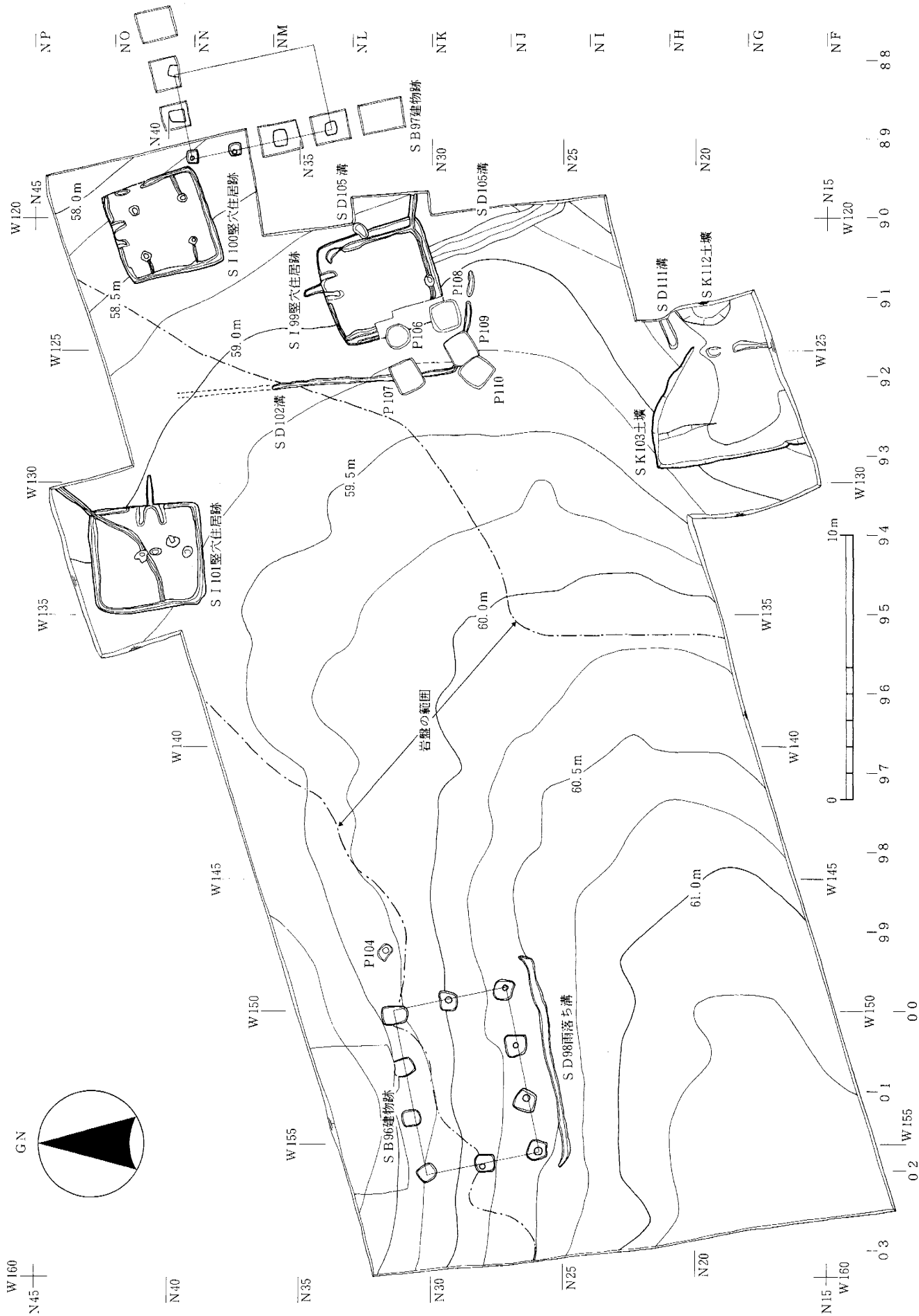
検出された各遺構は順次精査を進め、遺構精査の進んだ各遺構については随時写真を撮影し記録化すると共に、調査の進展に合わせて断面図を作成した。この過程で、S B 96建物跡は南側にS D 98雨落ち溝を伴うこと、S I 99・100竪穴住居跡にはS D 102溝が伴うことなどが知られた。

9月9日からは調査区全体に3m単位の測量基準点を設定し、平面図の作成を開始し、9月22日からは遺構面のレベル測量を開始した。

9月24日午前には桃生城跡第6次調査の成果を報道機関に対して公表し、9月27日午後一般を対象とした現地説明会を開催した。また、9月24日午後には多賀城跡調査研究指導委員会の現地指導を受けた。9月26日にはラジコン・ヘリコプターによる空中写真撮影を行った。

9月29日からは遺構細部の精査や記録化を行った。

10月17日からは埋め戻しを始め、10月20日には調査を終了した。



第3図 調査区全体図

V. 基本層序

桃生城は、北上山地の丘陵が北上川の流路である南北方向の峡谷によって切り離された独立丘陵上に立地している。桃生城の政庁は、立地する丘陵で最も大きな平坦地のある、遺跡の北東寄りの所に位置している。今回の調査地点はこの政庁地区の西側100～200mで、政庁地区から浅い谷を挟んで接続する丘陵上に位置する。この丘陵は政庁地区に次いで平坦地の広い場所で、標高は約55～62mと政庁地区より3mほど低い。調査地区は東西に伸びる丘陵頂部のやや平坦になっている部分である。頂部と南・北・東に傾斜する斜面からなっている。頂部と斜面へ変換する部分は、表土下がすぐに地山の粘板岩の岩盤となっている所が大部分であった。

基本層序は4層からなる。

第1層：暗褐色シルト層。 しまりのない層で表土。

第2層：にぶい黄褐色シルト層。 地山で、S B 96建物跡の北半やS K 103土壌周辺にかけて、部分的に分布している。

第3層：明黄褐色粘土層。 地山で、風化した粘板岩片を含む粘土層である。

第4層：明黄褐色岩盤層。 地山で、やや軟質の粘板岩の岩盤である。

VI. 発見された遺構と遺物

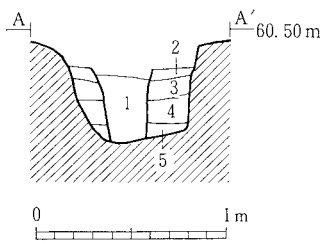
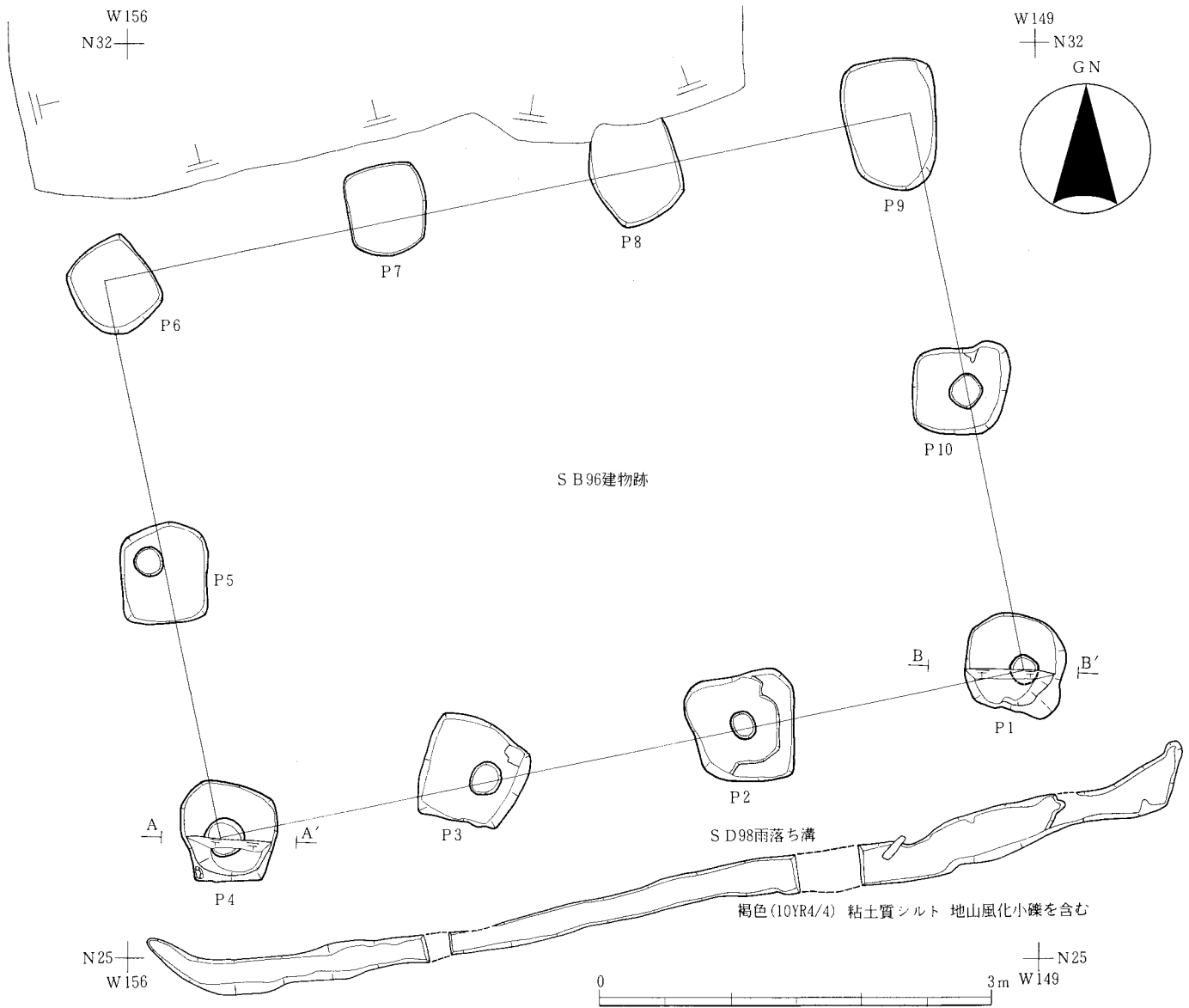
発見された遺構には、掘立式建物跡2棟、竪穴住居跡3棟、土壌2基、溝や近世の墓などがある(第3図)。出土遺物には、主に竪穴住居跡や土壌から出土した須恵器・土師器・瓦・石製品・鉄製品・鉄滓などがある。古代の遺構の多くは、平坦面周縁の傾斜変換線に近いところの地山面(第2層・第3層)の上面で検出され、頂部の岩盤の堅い地山(第4層)部分を避ける形で分布している。

(1)掘立式建物跡

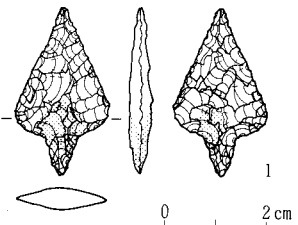
S B 96掘立式建物跡・S D 98雨落ち溝(第4図、図版3)

調査区北西隅の北緩斜面に位置する東西3間・南北2間の東西棟建物跡である。南側にS D 98雨落ち溝を伴う。10個の柱穴すべてを検出した。残りの悪い北側柱列を除く6個の柱穴(P 1～P 5・P 10)に柱痕跡が認められた。他の遺構との重複はない。

平面規模は、桁行が南側柱列で総長6.3m、柱間は東から2.2m・2.1m・2.0mである。梁行は、北側柱列の柱痕跡が確認できないため明らかでないが、東妻でみると総長約4.4mと推定される。柱間は南側の1間目で東妻・西妻とも2.2mである。建物方向は南側柱列でみると東で北に12°偏している。柱穴は長辺0.7～1.0m、短辺0.5～0.7mの長方形であるが、岩盤の堅い部分を掘り残しているものもある。深さは、最も残りの良い柱穴で約60cmである。柱痕跡は直径約25cmの円形である。柱穴の埋土

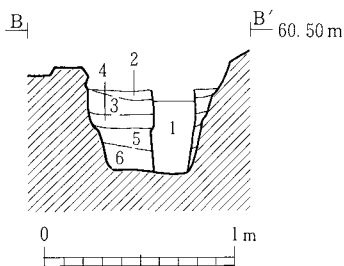


No.	土色	土性	概要
1	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	地山風化小礫を含む 柱痕跡
2	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山風化礫を含む
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	地山風化礫を含む
4	褐色(10YR4/4)	シルト	地山風化小礫を含む
5	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土質シルト	地山風化礫を多量に含む



S B 96建物跡 P 4 土層観察表

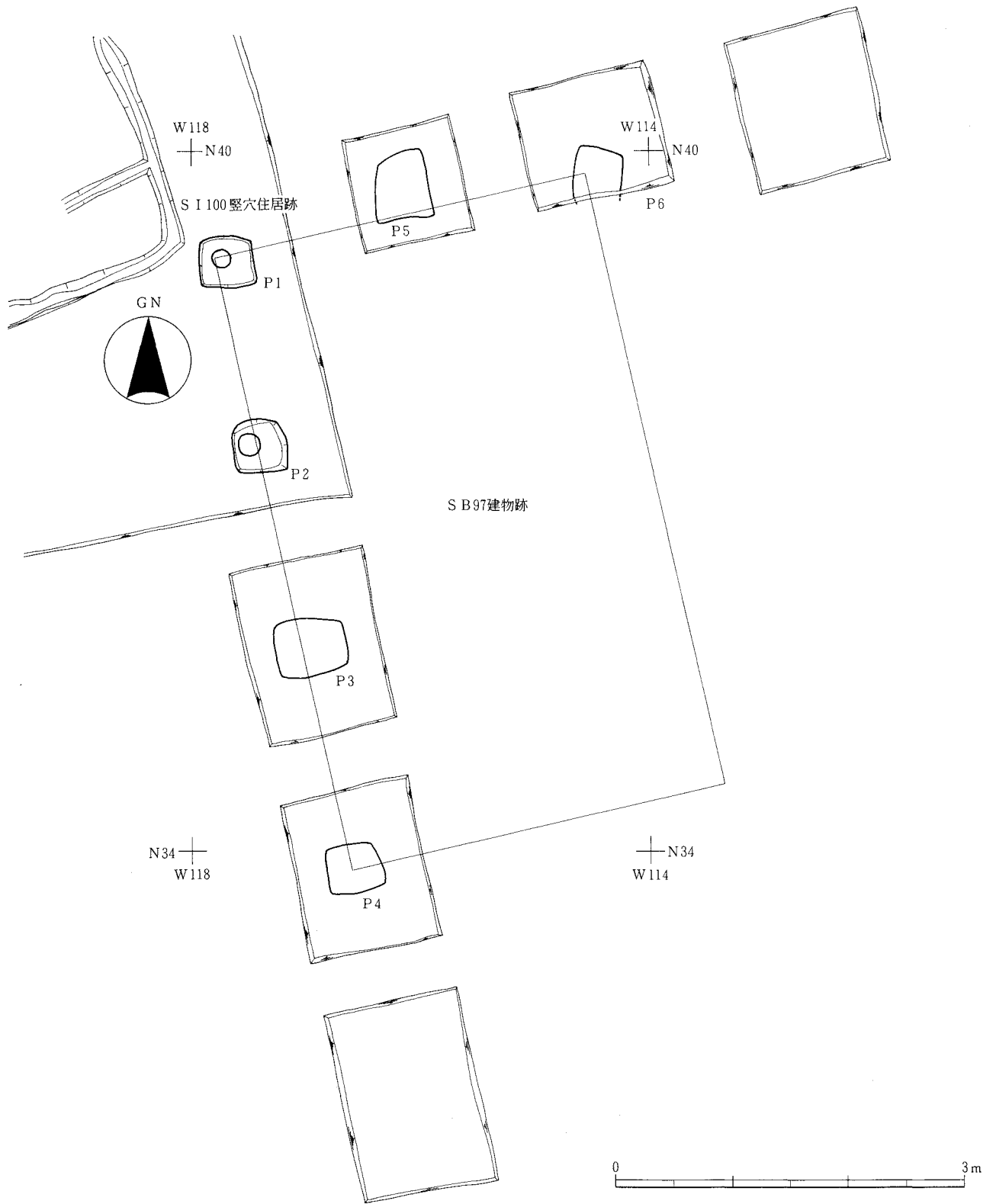
番号	層位	種別	特徴	登録箱番号
1	SB96 P9 埋土	石 鏃	長さ33.6mm 幅18.0mm 厚さ4.5mm	R80 12834



No.	土色	土性	概要
1	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	地山風化小礫を含む 柱痕跡
2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山風化礫を含む しまり強
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山風化礫を含む しまり強
4	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山風化礫を含む しまり強
5	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山風化礫を多量に含む
6	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	地山風化礫を含む しまり有

S B 96建物跡 P 1 土層観察表

第4図 S B 96建物跡・S D 98雨落ち溝と出土遺物



第5図 SB97建物跡

は地山風化礫を含むにぶい黄褐色土が主体で、柱痕跡は暗褐色土である。

S D 98雨落ち溝は、建物の南辺の地山面で検出された。幅約20～30cm、深さ約10cmであるが、ほとんど岩盤の部分に掘られているため、底面には凹凸がある。長さ約8.3mが検出され、東西両端は北に折れ曲がっている。南側柱列と溝の中心は約1.2m離れている。このことから、S B 96掘立式建物の軒の出は、約1.2m(4尺)であったものとみられる。

遺物はP 4・P 8の埋土から非ロクロ調整の土師器甕の破片が少量、P 9の埋土から石鏃(第4図)が1点出土している。土師器は小破片である。石鏃は頁岩製の有茎鏃で、基部にアスファルトが付着した痕跡を残す。

S B 97掘立式建物跡(第5図)

調査区東端の北寄りの緩斜面で検出され、南北3間、東西2間の南北棟と推定した建物跡である。調査区内の地山面で、柱痕跡が認められる柱穴が2個検出されたため、調査区外については柱の想定位置6ヵ所を部分的に調査した結果、北妻と西側柱列の柱穴4個を検出したもので、それぞれの柱列はこれ以上延びないことも確認した。他の遺構との重複状況はないが、S I 100竪穴住居跡とこの建物の北西隅は近接しており、同時には存在し得ないと考えられる。

平面規模は、桁行が西側柱列で総長約5.4mと推定され、柱間は北より約1.9m・約1.7m・約1.8mであり、梁行は北妻で総長約3.3m、柱間は西から約1.6m・約1.7mである。建物方向は西側柱列で、北で西に13°偏している。柱穴は一辺35～50cmの方形で、柱痕跡は直径約20cmの円形である。

遺物はP 3・P 6の調査区第1層から須恵器甕が少量、P 4の調査区第1層から須恵器甕と丸瓦1類の破片が出土している。

(2)竪穴住居跡と溝

S I 99竪穴住居跡(第6・7・8図、図版4)

調査地区東部の中央に位置している。残存状況は比較的良好であるが、新しいS D 105溝や近世の墓であるP 106・P 108と重複しており、南半部は壊されている部分がある。

平面形はほぼ正方形で、規模は東西約4.1m、南北約4.2mである。長軸方向は、北で西に約18°偏している。

残存壁高は約20～40cmで、北西隅が最も高い。床は第3層を床としており、ほぼ平坦である。床面のほぼ中央には、灰黄褐色土が薄く分布している。柱穴は検出されなかった。

周溝は北壁ではカマド西側の壁際に、西・南・東壁では壁の約10～30cm内側に検出された。幅約10～25cm、深さ約5～11cmで、この周溝に接続して南東隅から住居外に外延溝が伸びる。また、南壁沿いの周溝の西端近くに、長径45cm、短径30cm、深さ20cmほどのP 1が伴う。

カマドは北辺中央やや東寄りに付設されている。両側壁は地山粘質土で構築され、幅約25～30cm、長さ約60cm、高さ約20cmが残存している。煙道部・燃焼部の天井は崩落していた。燃焼部は馬蹄形で、幅約60cm、奥行き約65cmで、奥壁は約15cm程立ち上がり、煙道底面へと続いている。燃焼部奥壁寄りの底面は地山で焼け面となっているが、焚き口部には水平の整地層があり、部分的に一度修築された

と考えられる。煙道部は長さ約75cm、幅約23cm、深さ約10cmで、底面は先端に向かって浅くなっている。

堆積層は住居跡内に12層あり、使用時の堆積土と考えられる12層以外は、周溝堆積土の10・11層を含めて廃絶時の人為堆積層と考えられる。

S I 99 竪穴住居跡は S D 102 溝によって、S I 100 竪穴住居跡とともに囲まれている。

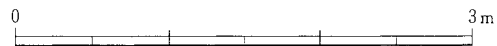
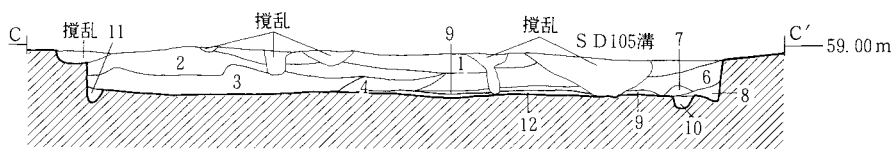
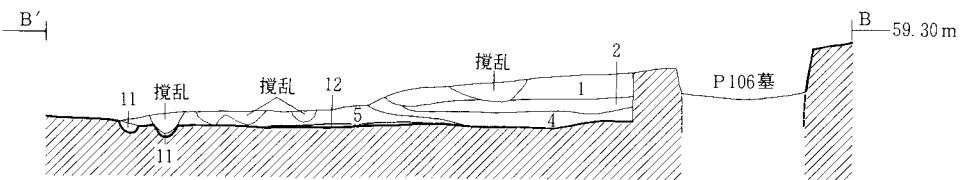
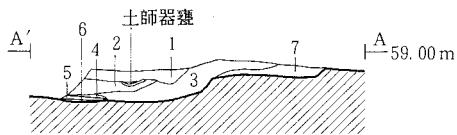
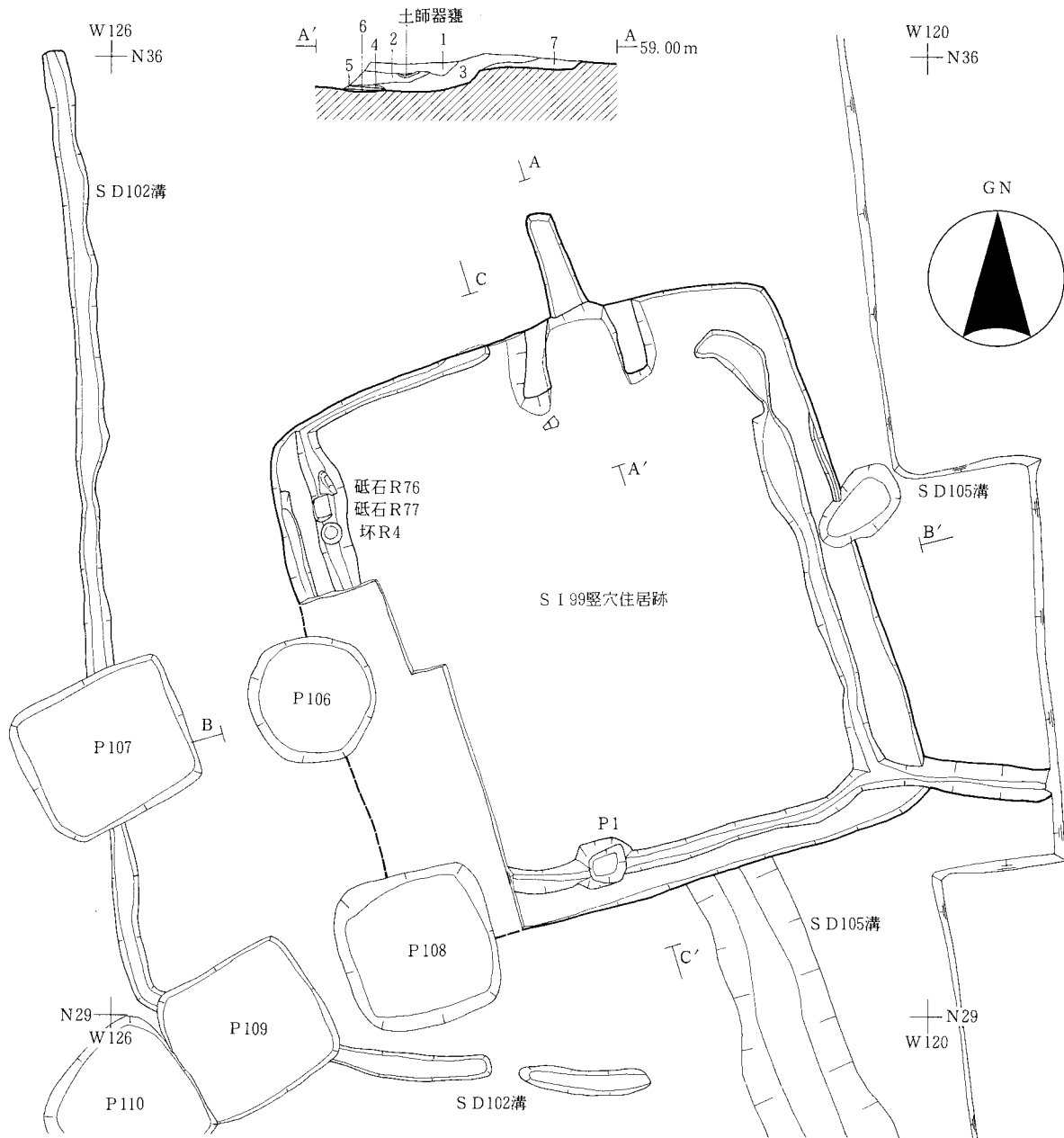
遺物は、周溝に伴う P 1 から砥石 1 点（第 8 図 1）、周溝内から砥石 2 点（第 8 図 2・3）と須恵器坏 3 点（第 7 図 3・4・7）が出土しており、砥石と坏（3・4）は西側周溝北半に並んでいた。また、7 は南側周溝西半から出土し、内面に漆膜が付着しており漆パレットとして使用したものである。床面からは非ロクロ調整の土師器有段丸底坏（第 7 図 8）や S I 101 竪穴住居跡出土の口～体部破片と接合した須恵器甕（第 7 図 10）、鉄鏟（第 8 図 4）などが出土している。カマド内からは須恵器坏（皿）（第 7 図 5）や非ロクロ調整で底部を欠く土師器甕（第 7 図 9）が出土している。人為堆積層からは、床面直上の 5 層から須恵器坏が 2 点（第 7 図 2・6）出土している他に、S I 100 竪穴住居跡人為堆積層出土のものと接合した須恵器坏（第 7 図 1）・高台坏Ⅱ・蓋・鉢・甕、土師器甕、有段の丸瓦 1 類、刀子（第 8 図 5）などが出土している。これらはいずれも廃絶時のものと考えられる。

出土遺物の中では、出土量は須恵器坏が最も多く、図示できたのはカマド出土の 1 点しかないものの、非ロクロ調整の土師器甕がそれに次いでいる。

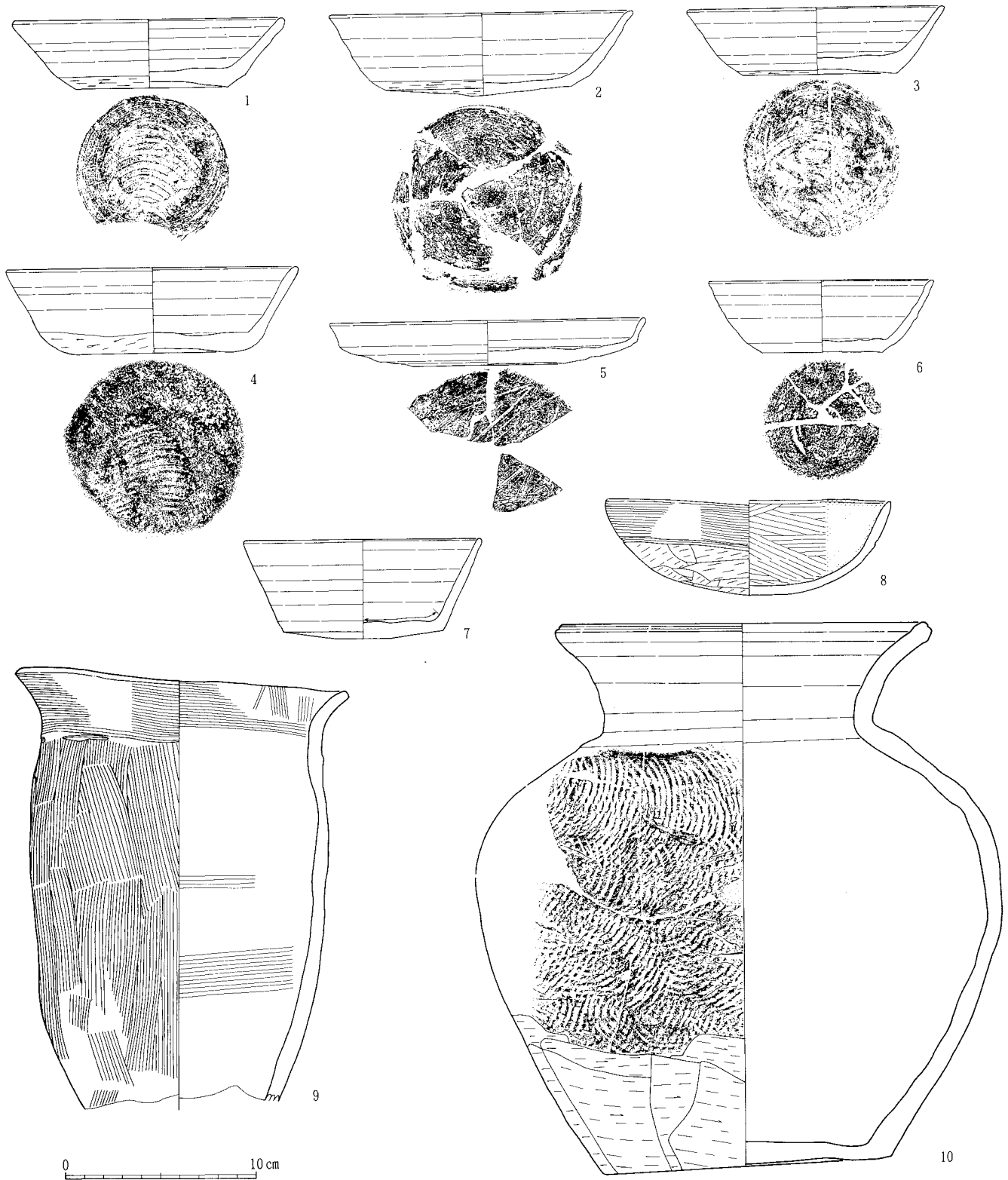
No.	土 色	土 性	概 要
1	にぶい黄褐色(10 YR5/4)	シルト	地山小礫を含む
2	にぶい黄褐色(10 YR4/3)	シルト	地山小礫を含む 木炭を少量含む
3	にぶい黄褐色(10 YR5/4)	シルト	地山小礫を含む 木炭を少量含む
4	褐色(10 YR4/4)	シルト	地山小礫を微量含む
5	明黄褐色(10 YR6/6)	粘土質シルト	地山小礫を含む
6	にぶい黄褐色(10 YR4/3)	粘土質シルト	地山小礫を少量含む
7	にぶい黄褐色(10 YR4/3)	シルト	地山礫主体の層 木炭を微量含む
8	褐色(10 YR4/4)	粘土質シルト	地山小礫を含む 粘性弱
9	にぶい黄褐色(10 YR6/4)	シルト	地山礫主体 地山粒を多量に含む
10	褐色(10 YR4/4)	粘土質シルト	地山小礫を含む 粘性弱 周溝埋土
11	褐色(10 YR4/4)	粘土質シルト	地山小礫を含む 粘性弱 周溝埋土
12	灰黄褐色(10 YR6/2)	粘土質シルト	風化地山粒を少量含む 生活層

S I 99 竪穴住居跡 カマド 土層観察表

S I 99 竪穴住居跡 堆積土 土層観察表

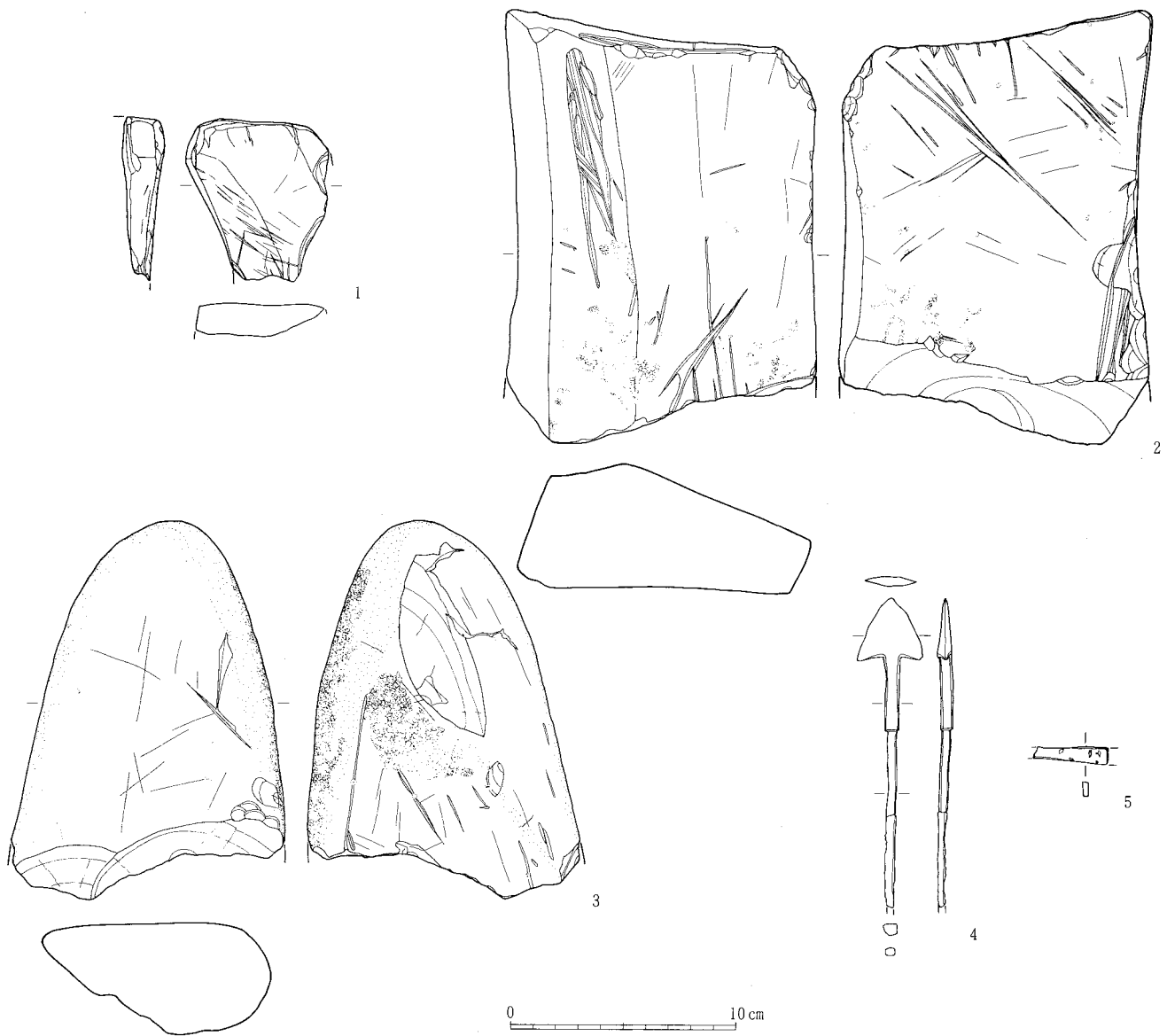


第 6 図 S I 99 竖穴住居跡と S D 102 溝



No.	種類	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	登録	箱番号
1	須恵器・坏	S I 99 2層	外面：ロクロナデ 静止糸切り→体下～底周縁 回転ヘラケズリ 内面：ロクロナデ S I 100埋土と接合	14.3	7.9	3.6	R7	12828
2	須恵器・坏	S I 99 5層	外面：ロクロナデ ヘラ切り?→体下～底全面 回転ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	16.0	9.8	4.35	R2	12828
3	須恵器・坏	S I 99 周溝底面	外面：ロクロナデ 静止糸切り→体下～底周縁 回転ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	13.5	8.0	3.5	R5	12828
4	須恵器・坏	S I 99 周溝	外面：ロクロナデ 静止糸切り→体下～底周縁 手持ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	15.4	8.8	4.5	R4	12828
5	須恵器・坏(皿)	S I 99 カマド	外面：ロクロナデ 底部切離し不明→底全面 手持ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	16.6	7.9	2.3	R3	12828
6	須恵器・坏	S I 99 5層	外面：ロクロナデ ヘラ切り?→体下～底全面 ナデ調整 内面：ロクロナデ	11.8	6.3	3.8	R1	12828
7	須恵器・坏	S I 99 周溝	外面：ロクロナデ 底部切離し・調整不明 内面：ロクロナデ 漆パレット	12.5	8.4	5.2	R8	12828
8	土師器・坏	S I 99 床・カマド	外面：ヨコナデ 沈線 ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ→黒色処理	14.9		5.0	R6	12828
9	土師器・甕	S I 99 カマド2層	外面：ヨコナデ 刷毛目 内面：ヨコナデ ナデ 刷毛目	17.5		23.1以上	R9	12831
10	須恵器・甕	S I 99 床	外面：ロクロナデ 円文タタキ ヘラケズリ 内面：ロクロナデ ナデ S I 101埋土と接合	19.6	15.0	28.8	R10	12831

第7図 S I 99 竈穴住居跡の出土遺物 (1)



No.	種類	出土遺構・層位	特徴	特徴	登録	箱番号
1	砥石	S I 99 P 1	長さ8.2cm 幅6.4cm 厚さ1.9cm	粘板岩 磨面表・左・上3面 右・下半・裏面破損	R74	12834
2	砥石	S I 99 周溝内	長さ19.3cm 幅13.9cm 厚さ5.7cm	砂岩角礫 磨面6面 切痕・敲打痕 下半欠	R77	12834
3	砥石	S I 99 周溝内	長さ16.9cm 幅12.1cm 厚さ5.0cm	砂岩円礫 磨面3面 切痕・敲打痕 下半欠	R76	12834
4	鉄鏃	S I 99 床	残存長13.7cm 最大幅30.0mm 厚さ6.5mm	三角形鏃 茎先端欠	R91	12834
5	刀子	S I 99 1層	残存長3.35cm 最大幅8.0mm 厚さ2.5mm	茎部分 両端欠	R93	12834

第8図 S I 99 竪穴住居跡の出土遺物 (2)

S I 100 竪穴住居跡（第 9・10 図、図版 5）

調査区北東隅に位置し、S I 99 竪穴住居跡の北東 3.5m の所で検出した。他の遺構とは重複していないが、S B 97 掘立式建物跡 P 1 と住居跡南東隅とは約 10cm しか離れておらず、同時には存在し得ないと考えられる。

平面形は歪んだ方形で、規模は東西約 3.7m、南北約 3.7m である。長軸方向は、北で西に約 17° 偏している。

壁は北東隅が削平により検出できなかったが、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は南西隅で約 45cm ある。第 3 層を床としており、ほぼ平坦であるが、北東隅は削平されているものと思われる。床面の中央部分には、木炭を含む層が薄く分布している。

住居長軸線に対して線対称となる位置に支柱穴が 4 個ある。支柱穴の平面形はほぼ方形で、規模は長軸約 30～35cm、柱痕跡の径は約 15cm である。支柱穴の東西の柱間は約 1.7m、南北の柱間は約 1.9m である。P 2～P 4 には柱穴と周溝を結ぶ幅約 10cm 前後、深さ約 5cm の溝があり、P 1 にも本来はこの溝があったものと思われる。

東辺北端を除く各辺には、幅約 20～30cm、深さ約 5～10cm の周溝が巡る。南辺・西辺・北辺では周溝は住居の壁を斜めに挟るかたちで掘り込まれている。

北辺の中央やや東寄りにカマドが付設されているが、煙道は削平され検出されなかった。両側壁は粘土で構築され、幅約 20～30cm、高さ約 5～13cm、長さは右側壁で約 55cm、左側壁で約 45cm が残存する。カマド燃焼部は幅約 60cm、奥行約 55cm で、底面と側壁内面は火熱を受けて赤変していた。燃焼部の底面は平坦で、奥壁高は約 7cm である。燃焼部奥壁ぎわの底面に粘板岩の板状礫が敷かれ、その上に両側壁の粘土が積まれており、周溝を掘ってからカマドを構築していることが知られる。

堆積層は 10 層あり、8～10 層は周溝堆積土、6・7 層は使用時の堆積土と考えられる。1～5 層は人為堆積層で、厚い堆積の 1・2 層は、1 層が第 3 層を、2 層が第 2 層の土を用いた人為堆積土と考えられる。

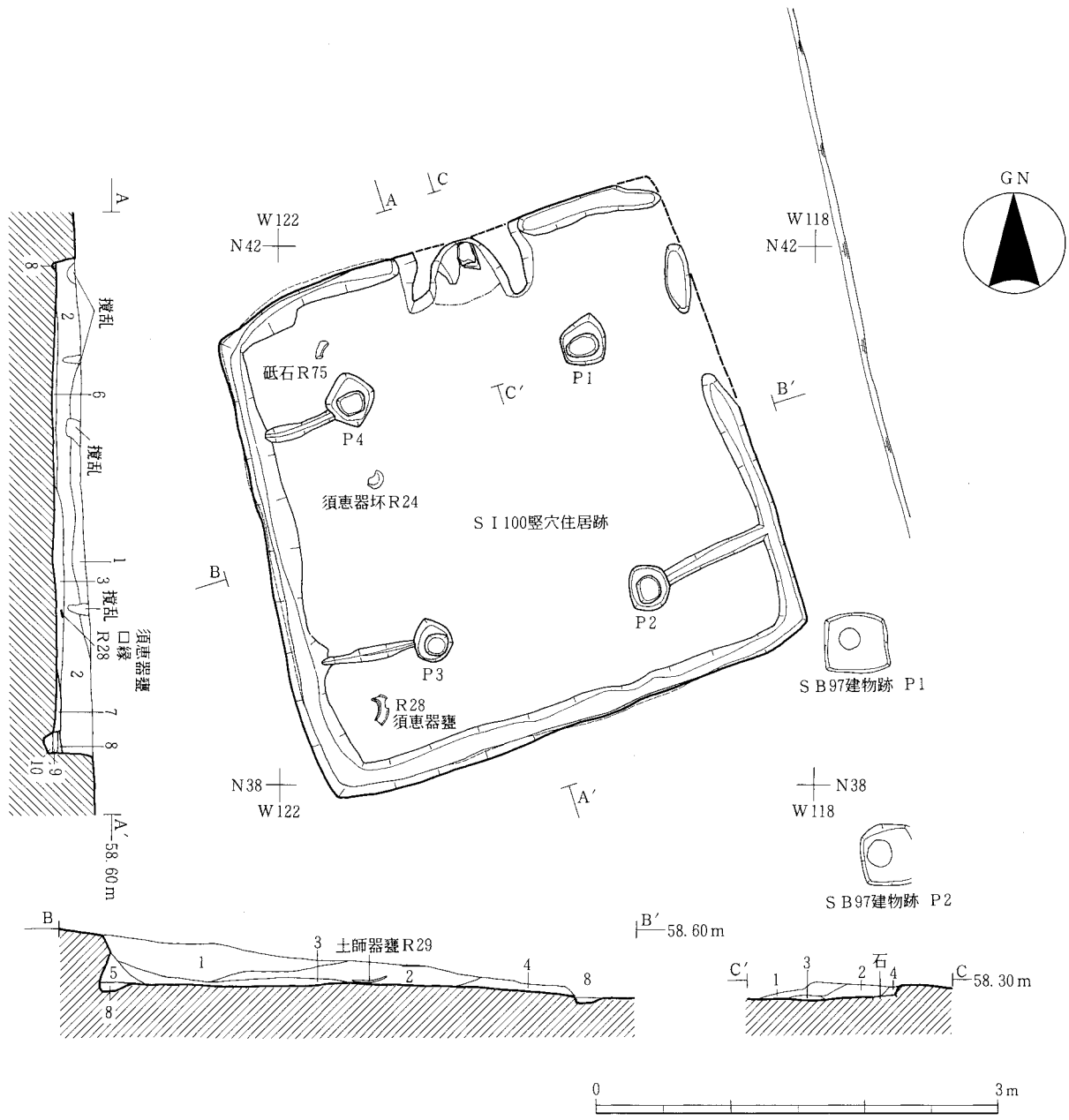
S I 100 竪穴住居跡は S D 102 溝によって、S I 99 竪穴住居跡とともに囲まれている。

遺物は、床面から須恵器坏（第 10 図 1）・高台皿（第 10 図 5）・蓋・甕（第 10 図 7・8）や非ロクロ調整の土師器坏・甕（第 10 図 9）、砥石（第 10 図 10）などが出土している。カマド・周溝などからも土師器・須恵器の破片が少量ずつ出土している。人為堆積層からは、須恵器坏（第 10 図 2・3）・高台坏（第 10 図 4）・蓋・鉢・甕や非ロクロ調整の土師器坏（第 10 図 6）・有段坏の破片・多くの甕の破片、丸瓦 1 類や敲石などが少量出土している。

S D 102 溝（第 3・6 図）

S D 99・100 竪穴住居跡の南側から西側を、L 字形に巡る溝跡である。幅約 10～20cm、深さ約 10cm で、断面形は浅い U 字形である。南側で 2.4m、西側で 6.8m 検出したが、西側は検出時にはさらに北に延びていた。近世の墓 P 107・109 に切られている。

遺物は埋土から須恵器甕破片が少量出土している。



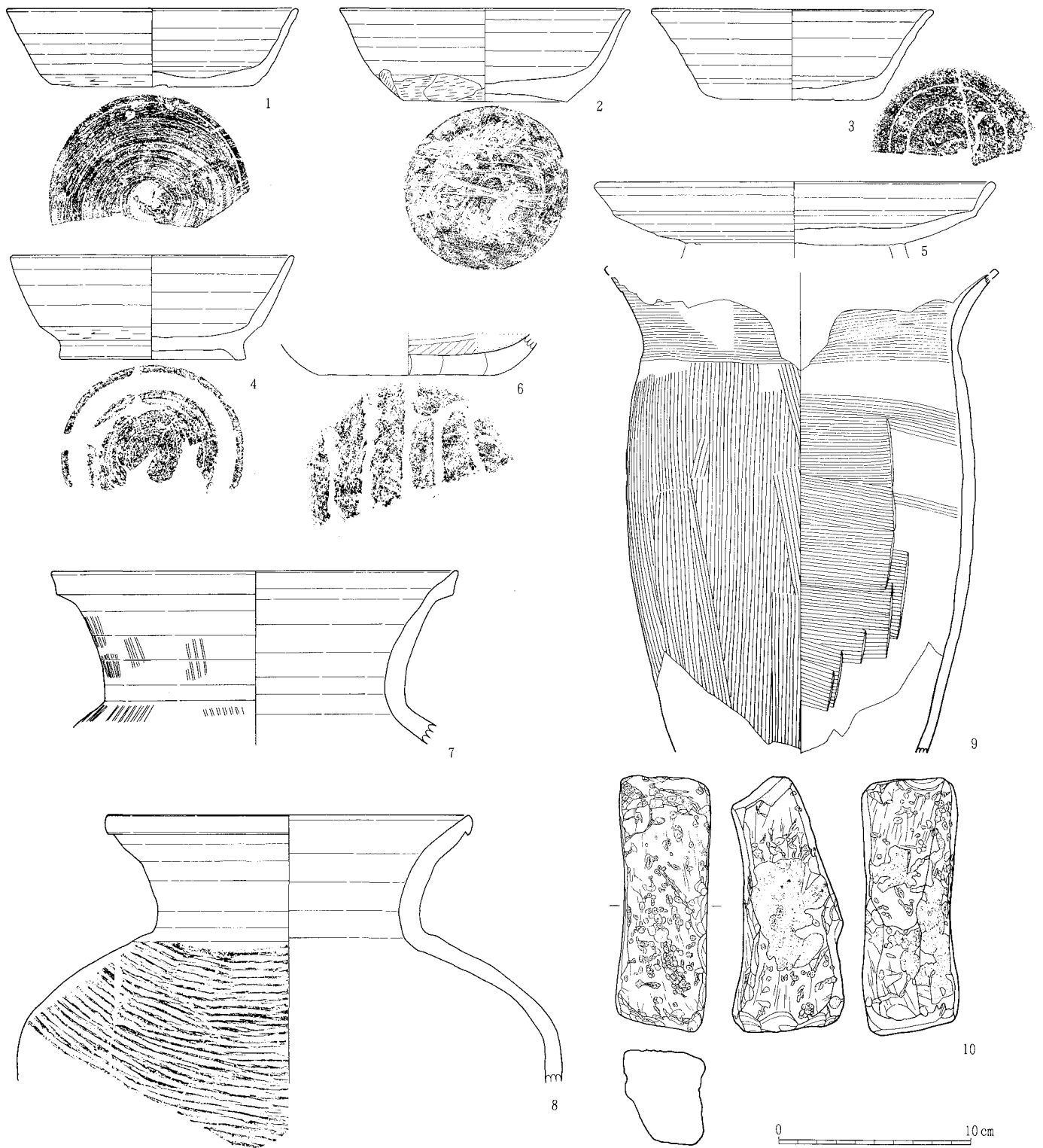
No.	土色	土性	概要
1	褐色(10 YR4/6)	シルト	地山礫を多量に含む 住居断面2層
2	にぶい赤褐色(5 YR4/4)	シルト	焼土層
3	暗赤褐色(2.5 YR3/3)	シルト	木炭層 住居断面6層
4	にぶい黄褐色(10 YR4/3)	シルト	地山粒を多量に含む 壁崩落土

カマド 土層観察表

No.	土色	土性	概要
1	にぶい黄褐色(10 YR5/4)	シルト	地山小粒・木炭粒を少量含む
2	褐色(10 YR4/6)	シルト	地山礫を多量に含む
3	褐色(10 YR4/6)	シルト	木炭を少量含む
4	にぶい黄褐色(10 YR5/4)	シルト	地山礫を多量に含む
5	褐色(10 YR4/6)	シルト	地山礫を少量含む
6	暗赤褐色(2.5 YR3/3)	シルト	焼土・木炭を多量に含む 生活層
7	黒褐色(10 YR3/2)	シルト	木炭を少量含む 生活層
8	にぶい黄褐色(10 YR4/3)	シルト	地山・木炭を含む
9	黒褐色(10 YR3/2)	シルト	木炭を含む 7層の崩壊土? 周溝埋土
10	褐色(10 YR4/6)	シルト	地山礫を多量に含む

堆積土 土層観察表

第9図 S I 100竪穴住居跡



No.	種類	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	登録	箱番号
1	須恵器・坏	S I 100 床	外面：ロクロナデ ヘラ切り→体下～底全面 回転ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	15.4	10.6	4.1	R24	12829
2	須恵器・坏	S I 100 1層	外面：ロクロナデ ヘラ切り?→体下～底全面 手持ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	15.3	8.5	4.9	R23	12829
3	須恵器・坏	S I 100 1層	外面：ロクロナデ ヘラ切り→体下～底全面 ナデ調整 内面：ロクロナデ	14.8	7.5	4.8	R21	12828
4	須恵器・高台坏	S I 100 1層	外面：ロクロナデ 坏体下～底全面 回転ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	14.9	高台径9.8	5.5	R22	12829
5	須恵器・高台皿	S I 100 床	外面：ロクロナデ 皿体下～底全面 回転ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	21.0	坏底径11.5	坏器高3.3	R25	12829
6	土師器・坏	S I 100 1層	外面：剥落不明 内面：ヘラミガキ→黒色処理		9.4		R26	12829
7	須恵器・甕	S I 100 床・3層	外面：ロクロナデ 縦位平行タタキ 内面：ロクロナデ ナデ	21.4			R28	12830
8	須恵器・甕	S I 100 床・1層	外面：ロクロナデ 横位平行タタキ 内面：ロクロナデ ナデ	19.4			R27	12829
9	土師器・甕	S I 100 床	外面：ヨコナデ 刷毛目 内面：ヨコナデ ナデ	19.8以上		25.0以上	R29	12831
10	砥石	S I 100 床	長さ13.4cm 幅4.9cm 厚さ5.9cm 凝灰岩 磨面6面 切痕・敲打痕 完形品				R75	12834

第10図 S I 100 竖穴住居跡の出土遺物

S 1101 竪穴住居跡（第11・12図、図版6・7上）

調査区北部東寄りに位置している。他の遺構との重複関係はない。

平面形は隅丸方形で、規模は東西約4.0m、南北約4.2mである。長軸方向は、北で西に約7°偏している。

壁の立ち上がりは急である。残存壁高は約8～40cmあり、南西隅が最も高い。第3層を床としており、ほぼ平坦である。柱穴は検出されなかった。

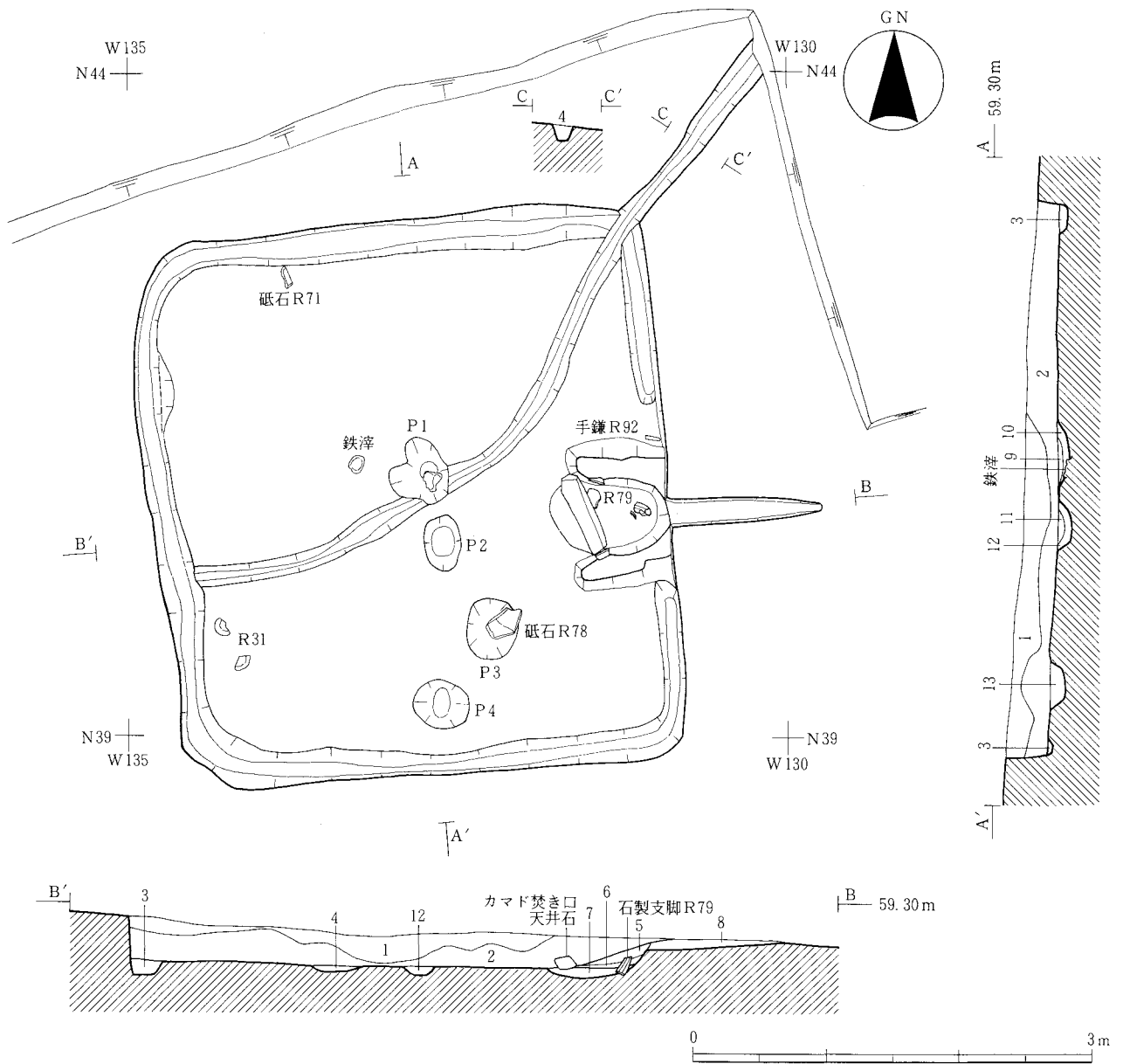
カマド付設部分を除き、幅約20～30cmの周溝が壁際を巡る。また、西壁周溝のほぼ中央から住居北東隅にかけて、住居を横断する形で幅約30cmの溝が伸び、そのまま外延溝として住居外まで続いている。

東辺の南寄りにカマドが付設され、天井部は崩落していたが、粘土で構築された両側壁が幅約25～40cm、長さ約75cm、高さ約10～15cmほど残存していた。側壁の両袖には芯となった土師器甕の破片が残る。カマド燃焼部は幅約65cm、奥行約75cmで、馬蹄形をしており、底面はほぼ平坦である。奥壁は約15cm立ち上がり、煙道底面へと続いている。煙道部は幅約30cm、深さ約12cmで、東に向かって浅くなりながら約1.2m延びる。カマド内には焚き口の天井石と考えられる焼けた角柱状の粘板岩や石製の支脚が残っている。燃焼部床面は浅い皿状の掘り方を掘り、支脚を据えてから土を入れて平坦にしたものと考えられる。

住居中央から南半部の床面で、土壌が4基並ぶように検出された。平面形はいずれも楕円形で、長径約40～50cm、短径約30～45cm、深さ約10cmである。中央のP1は堆積層に多量の木炭や鉄滓を含み、底面に椀形の鉄滓の残る焼けた土壌である。その南のP2も堆積土に木炭を多く、鉄滓を少量含む。P3からは砥面を横にした状態で大型の砥石が出土している。南壁ぎわのP4も堆積土に木炭を多く含む。

堆積層は13層認められる。このうち遺構細部の堆積土を除く、厚い1・2層は人為堆積層と考えられる。

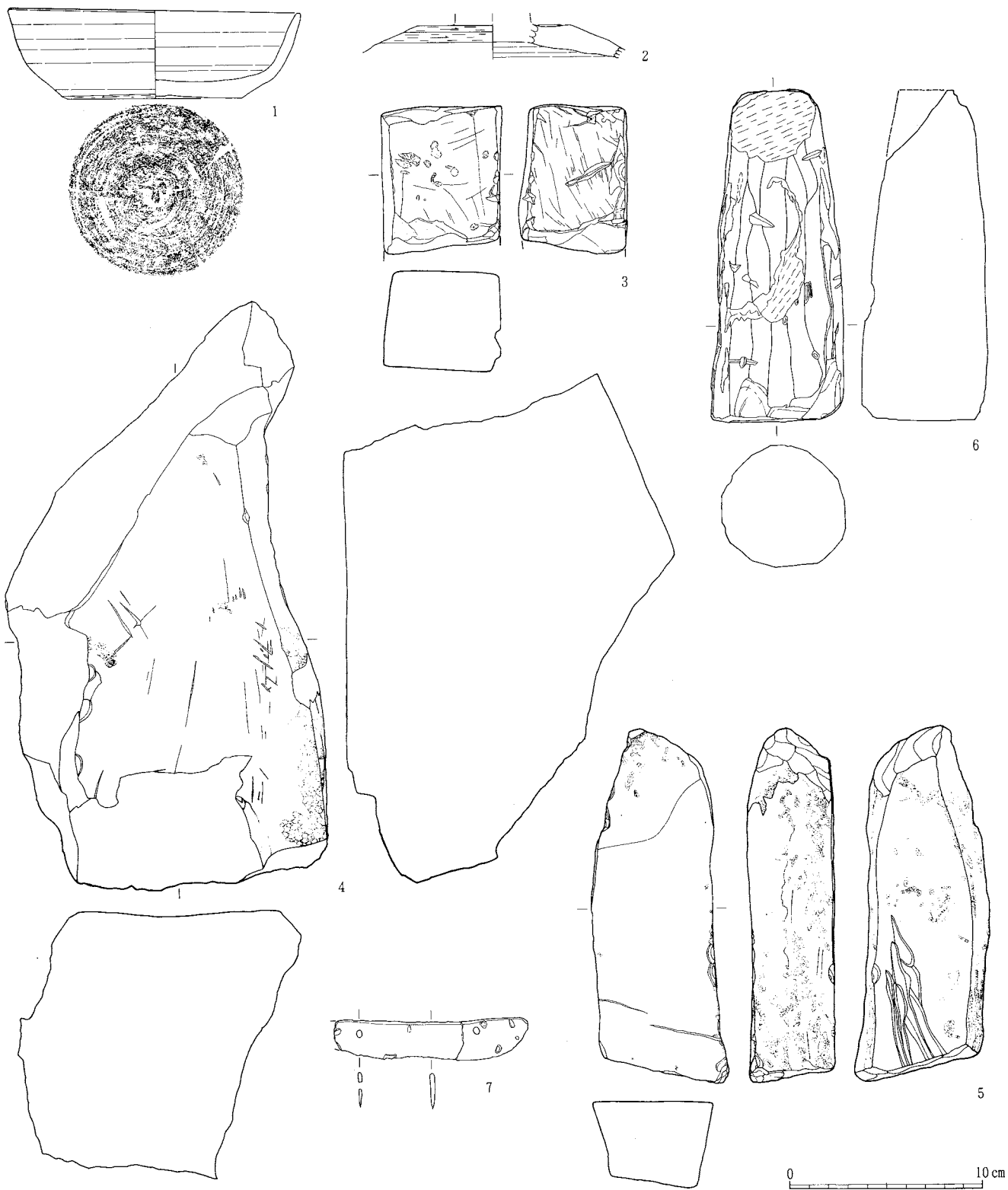
遺物は、床面から土師器甕、須恵器坏（第12図1）・甕、砥石（第12図5）、手鎌（第12図7）、椀形の鉄滓（図版10-9）が出土している。カマドからは石製支脚（第12図6）と非ロクロ調整の土師器甕破片が出土している。P1からは少量の須恵器甕破片と底面に張り付いていた椀形の鉄滓（図版10-10）を含む多くの鉄滓が、P2からも鉄滓が、P3からは砥石（第12図4）が出土している。外延溝からは非ロクロ調整の土師器甕口縁部破片が出土している。人為堆積層からは須恵器坏・蓋（第12図2）・鉢・甕、非ロクロ調整の土師器甕、砥石（第12図3）、少量の鉄滓が出土している。



No.	土色	土性	概要	No.	土色	土性	概要
1	にぶい褐色(7.5 YR5/4)	粘土質シルト	地山小粒をあまり含まない 人為	8	褐色(7.5 YR4/3)	粘土質シルト	煙道埋土
2	にぶい橙色(7.5 YR6/4)	粘土質シルト	地山小礫を多量に含む 堆積層	9	にぶい黄褐色(10 YR4/3)	粘土質シルト	鉄滓・木炭を含む P 1 埋土
3	にぶい黄褐色(10 YR4/3)	粘土質シルト	地山小礫を含む 周溝埋土	10	黒色(10 YR2/1)		木炭層
4	にぶい黄褐色(10 YR5/4)	粘土質シルト	地山小礫を含む 外延埋土	11	にぶい黄褐色(10 YR4/3)	粘土質シルト	地山小礫木炭を多く含む P 2 埋土
5	にぶい褐色(7.5 YR5/3)	粘土質シルト	地山小粒を少量含む カ堆積 マ積 下土	12	にぶい黄褐色(10 YR4/3)	粘土質シルト	木炭を多く含む 埋土
6	にぶい褐色(7.5 YR5/3)	粘土質シルト	地山粒を少量 焼土を多量に含む	13	にぶい黄褐色(10 YR4/3)	粘土質シルト	地山小礫木炭を多く含む P4埋土
7	にぶい赤褐色(5 YR4/4)	シルト	焼土層				

堆積土 土層観察表

第11図 S I 101 竪穴住居跡



No.	種類	出土遺構・層位	特徴	登録箱番号
1	須恵器・坏	S I 101 床	外面：ロクロナデ ヘラ切り?→体下～底全面 回転ヘラケズリ 内面：ロクロナデ 口径15.1cm底径7.0cm器高4.8cm	R31 12830
2	須恵器・蓋	S I 101 1層	外面：ロクロナデ 天井部 回転ヘラケズリ 内面：ロクロナデ リング状つまみ	R32 12830
3	砥石	S I 101 1層	長さ7.6cm 幅6.1cm 厚さ5.6cm 砂岩 磨面5面 切痕・敲打痕 下半欠	R73 12834
4	砥石	S I 101 P3	長さ30.4cm 幅16.5cm 厚さ17.1cm 砂岩角礫 磨面2面 切痕・敲打痕 置砥石	R78 12831
5	砥石	S I 101 床	長さ18.3cm 幅7.1cm 厚さ4.5cm 砂岩角礫 磨面4面 切痕・敲打痕 下端欠	R71 12834
6	石製支脚	S I 101 カマド	底径6.4cm 上端径3.5cm 高さ17.1cm 粘板岩を円錐形に加工 側面に面取り加工痕	R79 12834
7	手鎌	S I 101 床	長さ10.0cm 幅2.05cm 厚さ2.0mm 両端に紐通しの穴	R92 12834

第12図 S I 101 堅穴住居跡の出土遺物

(3)その他の遺構

S K 103土壌（第13・14図、図版7）

調査区南部の発掘拡張部に位置している。南半部は調査区外に延び、東半部はS D 111溝に切られる。S K 112土壌と重複し、S K 112土壌より新しい。

平面形は不整形で、規模は南北・東西とも約6 m以上と思われる。

壁の立ち上がりは急であり、残存壁高は最も高い北壁で約50cmであるが、東壁南半では削平により壁はなくなる。

底面は第3層の傾斜に沿う形で、南に向かって緩く傾斜している。西壁から約1.2m離れた所に、西壁に平行する形で東側の高い約10cmの高さの段差が認められるが、この段差も南へ約2.2mでなくなる。

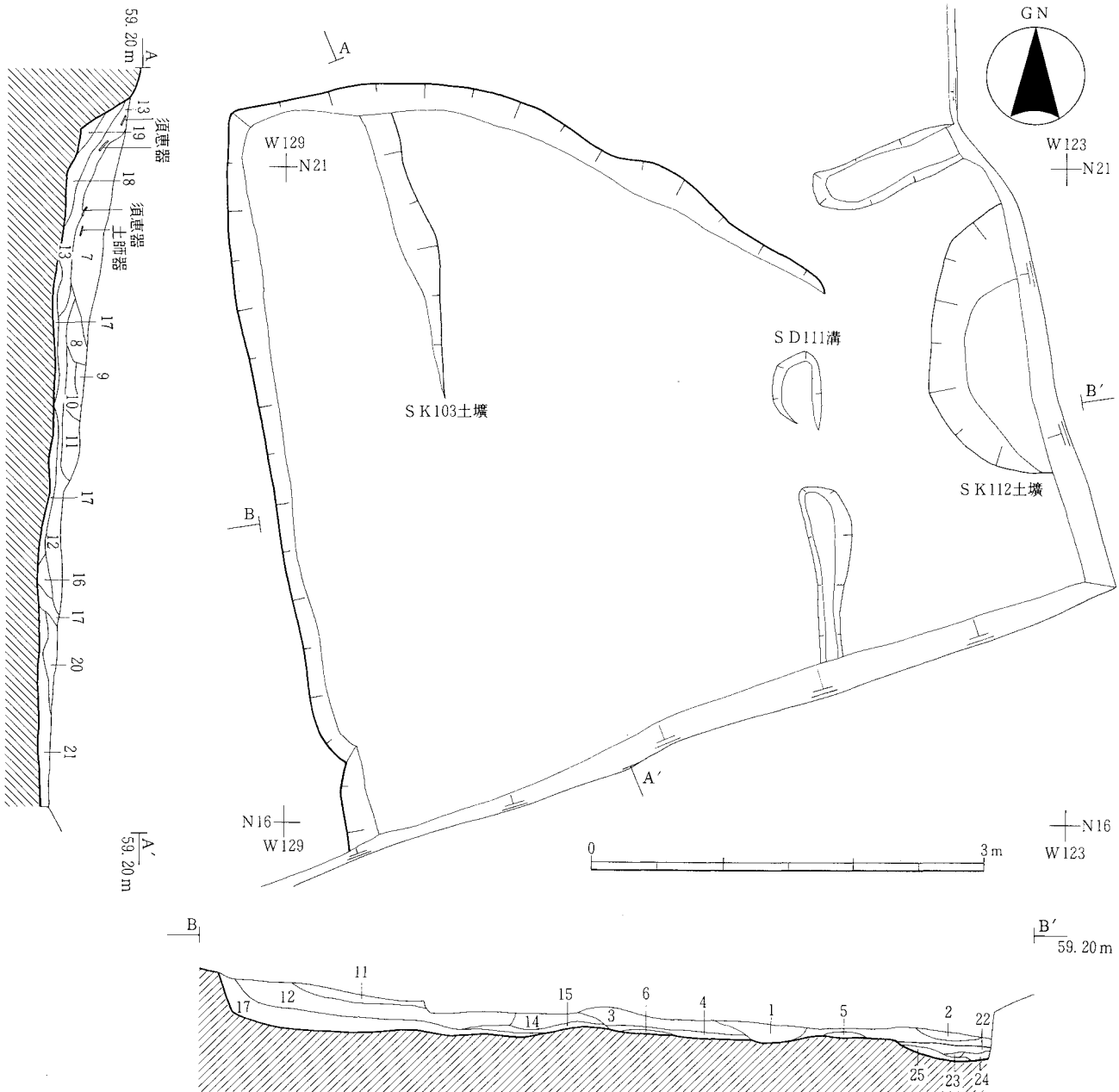
堆積土は20層ある。いずれも流入堆積した自然堆積層と思われる。断面を見ると南北断面で7～19層と20・21層の間に、東西断面で2～5層と11～17層の間に大きな違いがあると考えられる。この土壌は何回かの作り直しや重複があるのかもしれない。

遺物は、検出面・堆積層より須恵器坏（第14図1～4）・高台皿（第14図5）・高台坏（第14図6～11）・蓋（第14図12～16）・甕・鉢、非ロクロ調整の土師器坏・脚付皿（第14図17）・蓋（第14図18）・甕と平瓦1類の破片や鉄滓が少量出土している。

S K 112土壌（第13図）

調査区南部の拡張部に位置し、表土下とS K 103土壌堆積土下の第3層で検出された。東半は調査区外に延びている。S K 103土壌と重複し、S K 112土壌の方が古い。

平面形は南北に長い楕円形になる可能性があり、規模は長軸約2.1 mである。底面からの壁の立ち上がりは緩やかであり、残存壁高の最も高い北端で約18cmある。堆積層は4層あり、最下層が木炭層となっている。遺物は出土していない。



No.	土色	土性	概要	No.	土色	土性	概要	
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	粘性弱 地山礫を含む	SD111溝	14	明黄褐色(10YR6/6)	粘土質シルト	地山礫を含む
2	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	地山礫を含む	15	黒色(10YR1.7/1)	粘土質シルト	地山小礫・木炭粒を含む	粘性強い
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山小礫を多く含む	16	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘土質シルト	地山礫を含む	粘性弱い
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山土を含む	17	明黄褐色(10YR7/6)	粘土質シルト	地山礫を多く含む	粘性弱い
5	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山粒・木炭を微量含む	18	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック・地山粒を微量含む	
6	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	地山礫を多く含む	19	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山礫を少量・地山礫を微量含む	
7	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山小礫・須恵器・土師器を含む	20	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山礫を含む	
8	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山礫を多く含む	21	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山礫を多く含む	
9	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山粒を含む	22	褐色(10YR4/4)	シルト	地山礫を少量含む	
10	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山礫を含む	23	明黄褐色(10YR6/6)	粘土質シルト	地山礫を微量含む	粘性弱い
11	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	地山小礫を含む	24	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山礫・木炭を微量含む	
12	暗褐色(10YR3/4)	シルト	木炭・地山小礫を含む	25	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒を少し含む	木炭層
13	暗褐色(10YR3/4)	シルト	木炭を微量・地山粒・須恵器を含む					SK112 土壌 堆積土

堆積土 土層観察表

第13図 SK103・112土壌、SD111溝

S D105溝 (第3図)

調査区東端に位置し、S I 99竪穴住居跡と重複している。表土下の第3層やS I 99竪穴住居跡人為堆積層上面で検出され、S D105溝の方が新しい。

幅約60~80cm、深さ約10cmで、断面U字状の溝である。堆積土はしまりのない地山粒を含む黒褐色土で、近世以降の地境溝の可能性が高い。遺物は須恵器甕の破片が1点出土した。

S D111溝 (第13図)

調査区南部の拡張部に位置し、S K103土壌と重複している。表土下の第3層やS K103土壌の堆積土の上面で検出され、S D111溝のほうが新しい。

幅約40cm、深さ約20cmで、断面U字状のかき形に曲がる溝である。堆積土は自然堆積したしまりの悪いにぶい黄褐色土である。近世以降の地境溝かもしれない。遺物は出土していない。

P104柱穴 (第3図)

S B96建物跡の東妻北端の柱穴から、東に2.4m離れたところの第2層上面で検出された柱穴である。平面形は方形で、長軸約60cm、短軸約45cmの規模をもつ。直径約20cmの円形の柱痕跡をもつが、組み合わせる柱穴は見つからなかった。

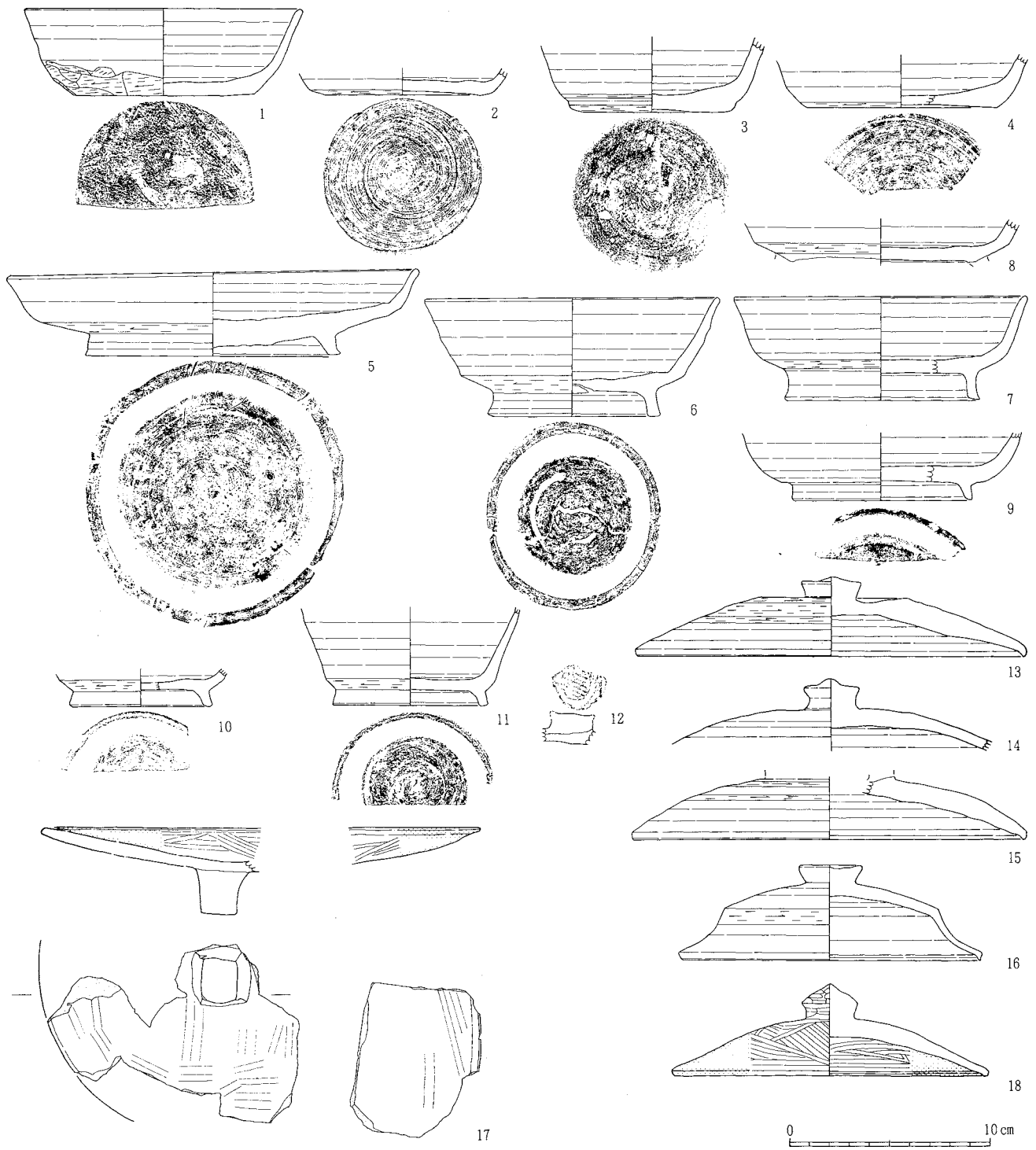
近世の墓 (P106~P110) (第6図)

合計5基の墓が調査区東端で近接して検出された。S I 99竪穴住居跡・S D102溝と重複し、これらを壊している。平面形は方形のもの4基と円形のもの1基がある。墓の検出面からS I 99竪穴住居跡を壊すP106では土師器甕の破片、P108では須恵器杯・蓋・壺、土師器甕の破片と棒状の鉄製品が出土している。断ち割りを行ったP108からは寛永通宝が(図版11-14)、P110からは陶器の小型碗2点(図版11-12)と寛永通宝・角釘(図版11-13)が出土した。

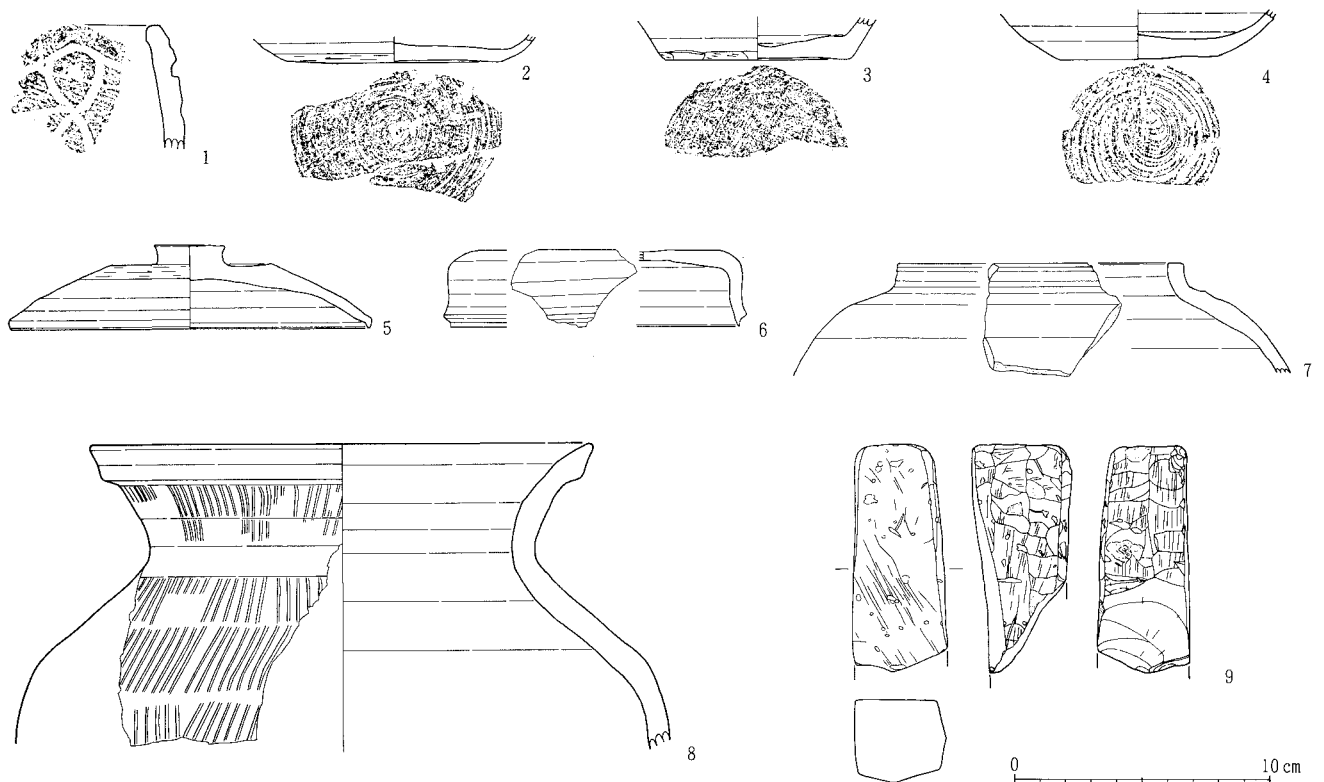
(4)表土出土の遺物 (第15図)

表採したもの及び第1層から出土した遺物には、縄文土器、須恵器、土師器、瓦、砥石、鉄滓、陶磁器などがある。

No.	種類	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	登録	箱番号
1	須恵器・杯	S K103 堆積土	外面:ロクロナデ ヘラ切り?→体下~底全体 手持ヘラケズリ 内面:ロクロナデ	13.9	9.0	4.4	R41	12832
2	須恵器・杯	S K103 堆積土	外面:ロクロナデ 底部切離し不明→体下~底全面 回転ヘラケズリ 内面:ロクロナデ		7.8		R42	12832
3	須恵器・杯	S K103 7層	外面:ロクロナデ ヘラ切り→体下~底全面 回転ヘラケズリ(平滑) 内面:ロクロナデ		7.6		R43	12832
4	須恵器・杯	S K103 検出面	外面:ロクロナデ 底部切離し不明→体下~底全面 回転ヘラケズリ 内面:ロクロナデ		9.5		R44	12832
5	須恵器・高台皿	S K103 検出面	外面:ロクロナデ 皿体下~底全面 回転ヘラケズリ 内面:ロクロナデ	20.6	高台径12.8	4.4	R47	12832
6	須恵器・高台杯	S K103 7層	外面:ロクロナデ 杯体下~底全面 回転ヘラケズリ 内面:ロクロナデ	14.8	高台径 8.7	5.9	R45	12830
7	須恵器・高台杯	S K103 13層	外面:ロクロナデ 杯体下~底全面 回転ヘラケズリ 内面:ロクロナデ	14.8	高台径 9.8	5.2	R46	12830
8	須恵器・高台杯	S K103 検出面	外面:ロクロナデ 杯体下~底全面 回転ヘラケズリ 内面:ロクロナデ 高台剥落		高台径 11.0以上		R50	12832
9	須恵器・高台杯	S K103 検出面	外面:ロクロナデ 強いナデ切離し 再調整不明 内面:ロクロナデ		高台径 9.0		R51	12832
10	須恵器・高台杯	S K103 検出面	外面:ロクロナデ 杯体下~底全面 回転ヘラケズリ 内面:ロクロナデ		高台径 7.2		R49	12832
11	須恵器・高台杯	S K103 検出面	外面:ロクロナデ 杯体下~底全面 回転ヘラケズリ 内面:ロクロナデ		高台径 7.8		R48	12832
12	須恵器・蓋	S K103 堆積土	宝珠状つまみ 外面:ロクロナデ 天井部切離し 静止糸切り 内面:ロクロナデ				R56	12833
13	須恵器・蓋	S K103 検出面	宝珠状つまみ 外面:ロクロナデ 天井部 回転ヘラケズリ 内面:ロクロナデ	19.6	天井高 3.0	4.0	R52	12832
14	須恵器・蓋	S K103 7層	宝珠状つまみ 外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ				R55	12833
15	須恵器・蓋	S K103 検出面	リング状つまみ 外面:ロクロナデ 天井部 回転ヘラケズリ 内面:ロクロナデ	19.8	天井高 3.0		R53	12833
16	須恵器・蓋	S K103 堆積土	宝珠状つまみ 外面:ロクロナデ 天井部・体部 回転ヘラケズリ 内面:ロクロナデ	15.2	天井高 3.9	4.8	R54	12833
17	土師器・脚付皿	S K103 検出面	3足付? 外面:ヘラミガキ→黒色処理 黒い被膜(漆?) 内面:ヘラミガキ→黒色処理				R58	12833
18	土師器・蓋	S K103 検出面・12層	宝珠状つまみ 外面:ヘラミガキ→黒色処理 内面:ヘラミガキ→黒色処理	15.8	天井高 2.8	4.6	R57	12833



第14図 S K 103土壌の出土遺物



No.	種類	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	登録	箱番号
1	縄文土器	N H95 1層	口縁部破片 他に体部破片1 波状口縁 波頂部に刺突 連鎖状沈線文				宮戸1b式 R58	12833
2	須恵器・坏	N J91 1層	外面:ロクロナデ 底部切離し不明→体下~底全面 回転ヘラケズリ 内面:ロクロナデ		8.6		R61	12833
3	須恵器・坏	Z Z 1層	外面:ロクロナデ 底部切離し不明→体下~底全面 手持ヘラケズリ 内面:ロクロナデ		7.4		R63	12833
4	須恵器・坏	N I90 1層	外面:ロクロナデ 回転糸切り 内面:ロクロナデ		6.2		R62	12833
5	須恵器・蓋	N K97 1層	宝珠状つまみ 外面:ロクロナデ 天井部 回転ヘラケズリ 内面:ロクロナデ	14.4	天井高2.5	3.3	R64	12833
6	須恵器・蓋	表 採	短頸壺蓋	約12.0		3.0以上	R65	12833
7	須恵器・短頸壺	表 採		約11.3			R66	12833
8	須恵器・甕	表 採	外面:ロクロナデ 縦位平行タタキ 内面:ロクロナデ ナデ	20.0			R67	12833
9	砥石	N H90 1層	長さ9.0cm 幅3.7cm 厚さ4.0cm 凝灰岩? 磨面5面 切痕・面取り加工痕 下半欠				R73	12834

第15図 表土・堆積層の出土遺物

縄文土器は波状口縁の口縁部の破片である（第15図1）。波頂部に刺突と横位沈線文、縦位の連鎖状沈線文が組み合って施される。この他に同一個体の体部破片が1点出土している。縄文時代後期の宮戸1b式である。

須恵器には坏、蓋、鉢、短頸壺（第15図7）、甕がある。坏には底部切り離しが不明で、外面の体部下端から底部全面を回転ヘラ削り調整したもの（第15図2）、手持ちヘラ削り調整したもの（第15図3）とがある。第15図4は底部を回転糸切りした無調整のものである。蓋には低平な宝珠状つまみをもち、天井部外面を回転ヘラ削り調整したもの（第15図5）と短頸壺の蓋と考えられるもの（第15図6）とがある。甕は頸部と体部に縦位の平行タタキが施されている（第15図8）。

土師器には非ロクロ調整の坏・高台坏・甕があり、瓦には平瓦1類・丸瓦2類などがある。

砥石は半欠品で、5面の磨面のうち使用しているのは2面だけで、他は面取り加工の痕跡が残る（第15図9）。

VII. 考 察

今回検出された遺構には、掘立式建物跡2棟、竪穴住居跡3棟、土壇2基、溝や近世の墓などがある。また、出土遺物には、主に竪穴住居跡や土壇から出土した須恵器・土師器・瓦・石製品・鉄製品・鉄滓などがある。ここでは遺構と出土遺物について若干の検討を加える。

遺 構

今回検出された遺構の中で、出土遺物などから古代のものと考えられる遺構にはS B 96・97掘立式建物跡、S I 99・100・101竪穴住居跡、S K 103・112土壇などがある。このうちS K 103土壇と112土壇には重複関係が認められ、S K 112→S K 103の新旧関係が知られる。それ以外の遺構にはいずれも重複関係は認められない。ただし、S B 97建物跡とS I 100住居跡は、近接していることから、同時には存在し得なかったと考えられる。

1. 掘立式建物跡

S B 96建物跡とS B 97建物跡は約33m離れて位置し、S B 96建物跡は東西棟、S B 97建物跡は南北棟で、全体の規模も異なっている。しかし、両建物跡の妻方向と棟方向はほぼ一致し、S B 96建物跡の南側柱列の延長線上に、S B 97建物跡の南妻が位置している(第3図)。これは離れて位置する2つの建物跡が規則性を持って配置されていることを示しており、両者は同一時期の建物跡と思われる。

2. 竪穴住居跡

3棟の竪穴住居跡が検出されたが、いずれも人為的な堆積土によって埋め戻されている。このうちS I 99住居跡とS I 100住居跡では、両者を取り囲むように、標高の高い南側と西側をS D 102溝が巡っていることから(第3図)、両者は同一時期に存続していたものと考えられる。また、両者の平面形・規模・長軸方向やカマド位置なども共通しており、さらに、S I 99・100住居跡の人為堆積土中から出土した第7図1の須恵器坏が接合関係をもち、両者が同一時期に埋め戻されたと考えられることから両住居がセットのものであることが窺える。

一方、出土遺物の接合関係はS I 99住居跡床から出土した第7図10の須恵器甕と、S I 101住居跡の人為堆積土・床から出土したものとの間にも認められる。S I 101住居跡はS I 99・100住居跡と長軸方向やカマド付設位置などに違いが認められるものの、この接合関係からこれらの住居跡と同時に埋められたものとみられる。したがって、竪穴住居跡は3棟とも同一時期のものと考えられる。

次に遺構と出土遺物から竪穴住居跡の性格を考えてみる。S I 101住居跡では住居中央から底面に椀形の鉄滓の残る焼けた土壇(P 1)が検出された。その南に堆積層に木炭を含む土壇(P 2・4)や砥石を据えた土壇(P 3)が並んでいる。出土遺物には鉄製品・鉄滓・砥石などがある。これらのことから、S I 101は鍛冶工房であったと考えられる。S I 99住居跡では、周溝に伴う土壇(P 1)から砥石、周溝内から砥石・漆塗りのパレットとして使われた須恵器坏、床面から鉄鏝が出土している。何らかの工房ないしは兵士にかかわる住居の可能性が考えられる。S I 100住居跡については、遺構・

出土遺物からその性格について考察することはできないが、セット関係をなすことからS I 99住居跡と同一の性格をもつ住居であったと考えられる。

出土遺物

出土遺物には3棟の竪穴住居跡やS K 103土壙から出土した遺物と表土出土の遺物がある。竪穴住居跡出土の遺物は、遺構の検討や接合関係により、時期的に同一のものと考えられた。そして、出土土器には土師器坏・甕、須恵器坏・皿・高台坏・高台皿・蓋・甕などの器種がある。また、S K 103土壙出土の土器には土師器高台皿・蓋、須恵器坏・高台坏・高台皿・蓋などの器種があり、これらは竪穴住居跡出土の土師器・須恵器と共通する特徴をもっていることから、同一時期のものと考えられる。ここでは竪穴住居跡とS K 103土壙出土の土器を一括し、その年代的な位置付けなどを検討する。

竪穴住居跡・S K 103土壙出土の土器

1. 土師器

土師器には坏・脚付皿・蓋・甕の器種があり、いずれも製作にロクロを使用していない。坏には有段丸底のもの（第7図8）と平底のもの（第10図6）があり、甕には頸部に段を有する長胴形のものがある（第7図9・第10図9）。これらはその特徴から国分寺下層式に位置付けられる（氏家：1967）。内外黒色処理される脚付皿（第14図17）・蓋（第14図18）も、器形や調整の特徴から国分寺下層式の範疇に含まれるものと考えられる。

2. 須恵器

須恵器には坏・皿・高台坏・高台皿・蓋・甕の器種がある。それぞれの器種の特徴などについてまとめると次のようになる。

〔坏〕（第7図1～4・6・7、第10図1～3、第12図1、第14図1～4）

坏はいずれも体部から口縁部にかけて直線的ないし丸みをもって外傾する器形のものである。この中には体下部に屈曲をもつもの、内弯気味に立ち上がるもの、外反気味に立ち上がるものなどがある。図示した全体形のわかる坏は11点で、底部の切り離してみると、ヘラ切りやヘラ切りの痕跡をのこすものは7点、静止糸切りのもの3点、不明のもの1点である。

再調整は回転ヘラケズリが体下半から底部全面に施されるものが3点、体下半から底部周縁に施されるものが2点あり、手持ちヘラケズリが体下半から底部全面に施されるものが2点、体下半から底部周縁に施されるものが1点ある。ナデ調整が体下半から底部全面に施されるものが2点あり、不明のものが1点ある。

法量は口径11.8～16.0cm（平均14.4cm）、底径6.3～10.6cm（平均8.3cm）、器高3.5～5.2cm（平均4.4cm）で、数値的にはばらつきがある。口径に対する底径の比率をみると、0.46～0.69の間に分布がみられる。

〔皿〕（第7図5）

1点ある。底部から体部にかけて丸みをもって緩やかに立ち上がり、口縁部は強く外反しながら外

傾する。底部全面に手持ちヘラケズリの再調整が加えられており、底部切り離しは不明である。法量は口径16.6cm、底径6.3cm、器高2.3cmである。

〔高台坏〕（第10図4、第14図6～11）

全体形のわかるものが3点、口縁部や高台を欠くものが4点ある。坏部は体下部に屈曲をもち、屈曲部から口縁部まで直線的に外傾する。高台部は「ハ」字状にひらき、高台は断面が方形になるものと外端が尖るものがある。

坏部体下半から底部全体が回転ヘラケズリされ、その後高台を付着して付着部分をロクロナデされている。これらの調整のため坏底部の切り離し技法はいずれも不明である。法量は口径14.8～14.9cm（平均14.8cm）、高台径7.2～9.8cm（平均8.7cm）、器高5.2～5.9cm（平均5.5cm）である。

〔高台皿〕（第10図5、第14図5）

全体形のわかるものが1点、高台を欠くものが1点ある。底部から体部が丸みをもって緩やかに立ち上がり、口縁部は外反しながら外傾する。高台部は「ハ」字状にひらき、高台は外端が尖る。

皿体部下半から底部全体が回転ヘラケズリされ、その後高台を付着して付着部分をロクロナデしており、これらの調整のため皿底部の切り離し技法はいずれも不明である。法量は口径20.6・21.0cm、高台径12.8cm、器高4.4cmである。

〔蓋〕（第12図2、第14図12～16）

6点図示したが、全体形のわかるものは2点である。つまみの形状は扁平な宝珠状のもの4点、つまみ部は残存しないがリング状となると考えられるもの2点（第12図2、第14図15）とがある。平坦な天井部から口縁部にかけて直線的に外傾し、口縁端部が下方に短く折り返されている。1点だけ天井部が丸みをもち、体部が強く外反し、口縁端部が下方に短く折り返されものがある（第14図16）。

天井部には回転ヘラケズリが数段施されるが、14には回転ヘラケズリが認められない。12はつまみ部の破片であるが、つまみが剥離した天井部外面に静止糸切りの切り離しの痕跡が残る。法量は口径15.2～19.8cmで、器高は13が4.0cm・16が4.8cm、天井高は13が3.0cm・16が3.9cmである。

口径から、これらの蓋は坏・高台坏の坏類に組み合うものと思われる。

〔甕〕（第7図10、第10図7・8）

全体形のわかるものが1点、体部上半までのものが2点ある。器形は体部上半に最大径をもち、頸部で屈曲して口頸部は外反し、口縁端部は縁带状となるもの（7・8）と上面に沈線が巡るもの（10）とがある。体部上半はやや肩が張る。

調整としては内外共ロクロナデされるが、10の体部外面には円文タタキが、体部下半には横位のヘラケズリが施される。7の口頸部と体部外面には縦位の平行タタキが、8の体部外面には横位の平行タタキが施される。内面にはナデが施されている。法量は口径が19.4～21.4cmで、10は口径19.6cm、底径が15.0cm、器高が28.8cmである。いずれも中型の甕と考えられる。

表土出土の土器（第15図）

表土出土の土器には縄文土器・須恵器がある。縄文土器はすでに所属時期について述べてあるので、

ここでは須恵器についてみる。

須恵器には坏・蓋・短頸壺・甕などの器種があり、坏には底部切り離し不明で、回転ヘラケズリの再調整が施されるもの1点(2)、手持ちヘラケズリの再調整が施されるもの1点(3)、回転糸切り無調整のもの1点(4)がある。蓋には扁平な宝珠状のつまみをもつ坏蓋(5)と、つまみをもたない壺蓋(6)とがある。5の法量は口径14.4cm、器高3.3cm、天井高2.5cmである。短頸壺は口縁から体部上半の破片で、短く直立する口縁を持つ(7)。甕は口縁から体部上半の破片で、口径20.0cmである(8)。口頸部と体部外面には縦位の平行タタキが施されている。

これらの須恵器は4の坏を除けば、遺構出土の須恵器と同じ特徴をもっており、遺構出土の須恵器に類例のない壺蓋や短頸壺も含めて同時期のものと考えられる。

年代的位置付け

今回出土した土師器・須恵器について堅穴住居跡・S K103土壌、表土別にその特徴を述べたが、それをまとめると次のようになる。

1. 土師器は出土量は少ないが、坏・脚付皿・蓋・甕の器種があり、いずれも国分寺下層式に位置付けられる。
2. 須恵器は土師器に比べて出土量が多く、坏・皿・高台坏・高台皿・蓋・鉢・壺・甕の器種がある。
これを桃生城跡第3次調査で西脇殿から出土した須恵器(宮城県多賀城跡調査研究所:1995)と比較すると、政庁西脇殿から出土した須恵器坏・高台坏などは口径・底径・器高など法量にまとまりが強い。これに対し、今回出土した須恵器では法量にややばらつきが認められる。しかし、底部の切り放しがヘラ切り主体で、回転ヘラケズリで再調整が行われるものが多いことや器形の特徴は西脇殿出土のものと類似している。したがって、今回出土した須恵器は政庁西脇殿出土の須恵器と同じ8世紀第3四半世紀に位置付けられと考えられる。この年代は土師器の国分寺下層式で考えられている年代の範疇である。
3. 表土出土の土器をみると、第15図4の須恵器坏を除き堅穴住居跡・S K103土壌出土のものと同じ特徴を有しており、これらのものと同時期のものと考えられる。

遺構の年代

1. 出土土器の年代の検討により、堅穴住居跡・S K103土壌の年代は8世紀第3四半世紀の桃生城存続期間(760~774年)と考えられる。重複関係からS K103土壌より古いと考えられたS K112土壌もほぼ同時期と推定される。
2. 次に建物跡の年代を考える。S B96建物跡の柱穴からは土師器甕の破片が出土しているが、小破片であり年代を決定する資料としては不十分である。しかし、今回出土した土器は、表土出土の1点を除き、すべて8世紀第3四半世紀の桃生城存続期間の年代が考えられた。このことから建物跡の年代も堅穴住居跡などと同時期のものと考えられる。
3. 堅穴住居跡と建物跡は、いずれも桃生城存続期間の年代が考えられた。しかし、S B97建物跡と

S I 100住居跡は同時存在はあり得ないほど、近接しており、前後関係が考えられる。これを解明する手がかりとして、S I 99～101住居跡が人為的に埋められていることがある。これは、この地域を再利用するための整地地業とみられる。この地域にはS B 97建物跡以外の遺構は存在しないので、こういった3つの住居跡を同時に埋め戻すと言った大規模な整地地業はS B 97建物建設のための地業と見なすことができる。したがって、S I 100住居の廃絶とS B 97建物の建設とは連続して行われた可能性が高い。また、S B 96建物跡はS B 97建物跡と規則性を持って配置されており、これらの建物跡は同一時期と考えられたので、S B 96建物跡も竪穴住居跡群に後続するものと考えられる。

ま と め

第6次調査の成果をまとめると、次のようになる。

- ①政庁の西側丘陵平坦部にも、桃生城存続期の竪穴住居、掘立式建物が存在することが明らかになった。
- ②竪穴住居群は掘立柱建物に先行し、工房や兵士に関わるものと見られる。
- ③掘立柱建物跡は2棟検出され、さらに西側に展開する可能性がある。

引用・参考文献

- 宮城県多賀城跡調査研究所 1975:『桃生城跡Ⅰ』(多賀城関連遺跡発掘調査報告書第1冊)
宮城県多賀城跡調査研究所 1976:『桃生城跡Ⅱ』(多賀城関連遺跡発掘調査報告書第2冊)
宮城県多賀城跡調査研究所 1995:『桃生城跡Ⅲ』(多賀城関連遺跡発掘調査報告書第20冊)
宮城県多賀城跡調査研究所 1996:『桃生城跡Ⅳ』(多賀城関連遺跡発掘調査報告書第21冊)
宮城県多賀城跡調査研究所 1997:『桃生城跡Ⅴ』(多賀城関連遺跡発掘調査報告書第22冊)
氏家和典 1967:「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって－奈良・平安期土師器の諸問題－」
『山形県の考古と歴史』 柏倉亮吉教授還暦記念会刊

報告書抄録

ふりがな	ものうじょうあと6							
書名	桃生城跡 VI							
副書名								
巻次								
シリーズ名	多賀城関連遺跡発掘調査報告書							
シリーズ番号	第23冊							
編著者名	阿部恵・佐藤和彦							
編集機関	宮城県多賀城跡調査研究所							
所在地	〒985-0861 宮城県多賀城市浮島字宮前133 TEL 022-368-0101							
発行年月日	西暦 1998年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ものうじょうあと 桃生城跡	みやぎけん ものうぐん 宮城県桃生郡	04561	004	38度 31分 49秒	141度 16分 50秒	19970801～ 19971020	800	調査計画に 基づく学術 調査
	かほくちょう 河北町 みやぎけんものうぐん 宮城県桃生郡 ものうちょう 桃生町							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
桃生城跡	城柵	奈良時代 後半	掘立式建物跡	2棟	須恵器・土師器・瓦(丸瓦・平瓦)・砥石・石製支脚・鉄鏃・手鎌・刀子・角釘・鉄滓			政庁西側平坦部も、東側と同様に官衙域として使用されていた。 竪穴住居跡群から掘立式建物へ変遷している。 8世紀第3四半世紀の須恵器の基準資料に新しい知見が加わった。
			竪穴住居跡	3棟				
			土壌	2基				
			溝	4条				

写真図版

桃生城跡政庁と調査区
(上空から)

(B9682)



桃生城跡遠景
(政庁南から北を望む)

(B9681)



桃生城跡遠景
(政庁南東から北西を望む)

(B9677)



調査区全景
(上空から)



(B9672)

調査区東半
(上空から)



(B9675)

調査区西半
(上空から)



(B9676)

SB96建物跡と
SD98雨落ち溝
(北から)



(B9720)

SB96建物跡と
SD98雨落ち溝
(東から)



(B9721)



SB96建物跡P1断面 (B9722)
(南から)

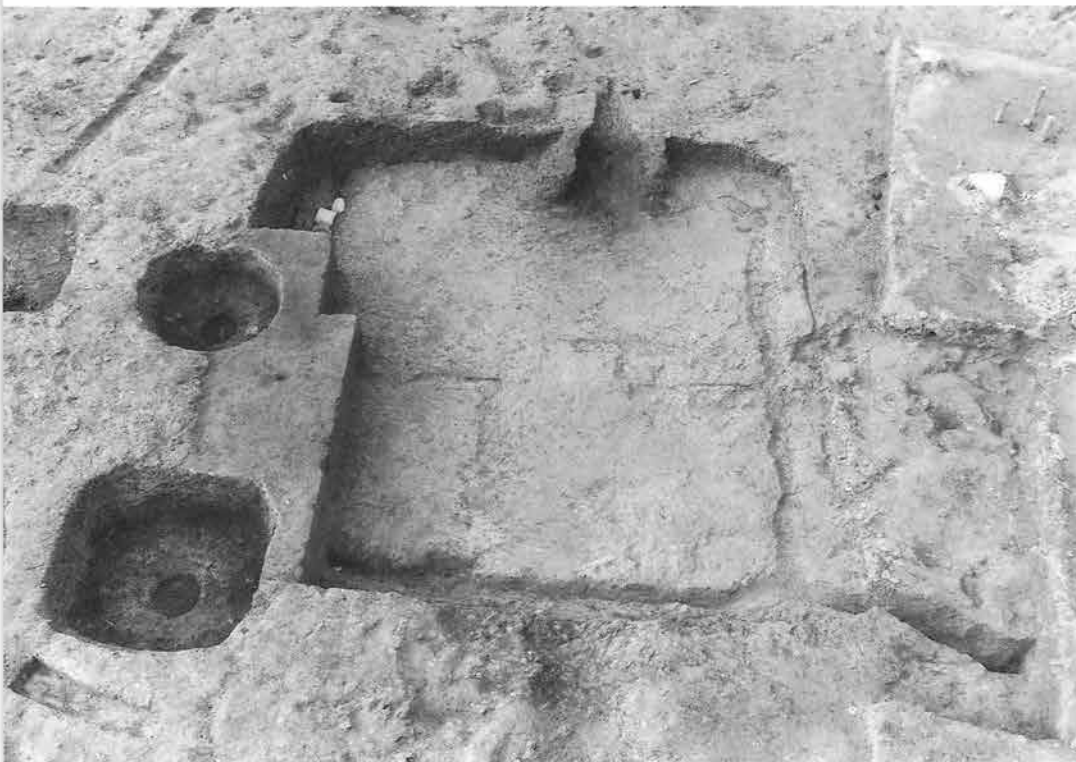


SB96建物跡P4断面 (B9724)
(南から)



SI99竪穴住居跡
堆積土
(西から)

(B9689)



SI99竪穴住居跡
(南から)

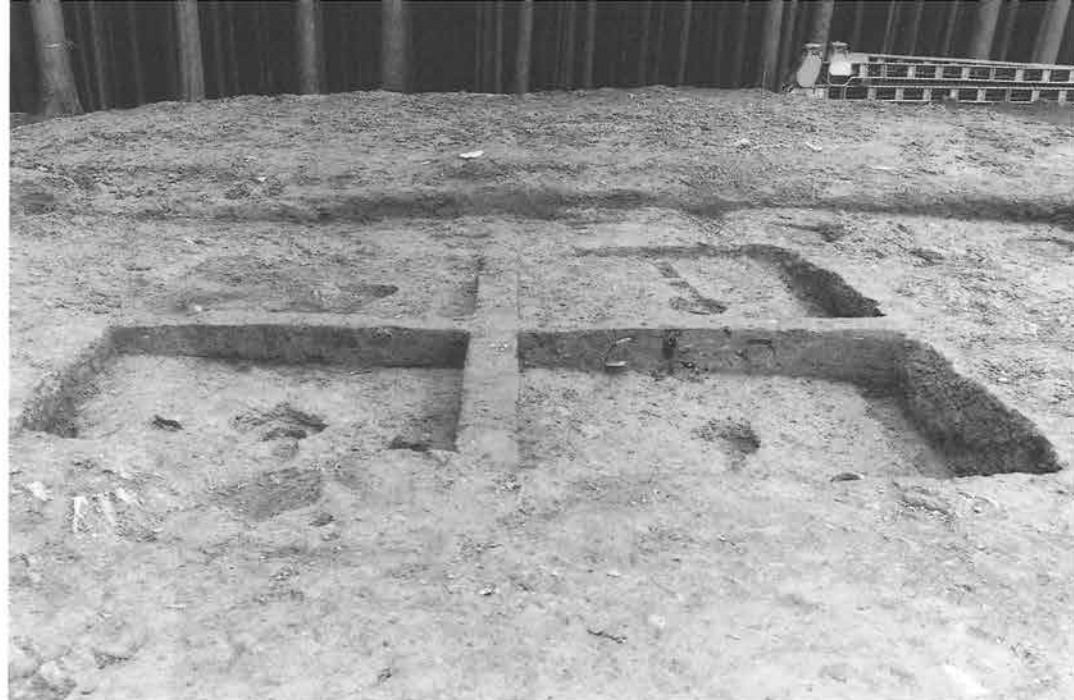
(B9709)



SI99竪穴住居跡
カマド
(南から)

(B9710)

SI100竪穴住居跡
堆積土
(西から)



(B9691)

SI100竪穴住居跡
(南から)
右下にSB97建物跡
P1が見える



(B9712)

SI100竪穴住居跡
カマド
(南から)



(B9713)



SI101 竪穴住居跡
堆積土
(東から)

(B9688)



SI101 竪穴住居跡
(西から)

(B9714)



SI101 竪穴住居跡
カマド
(西から)

(B9715)

SI101 竪穴住居跡床面
P1 と鉄滓
(南から)



(B9718)

SK103 土壇
(南西から)

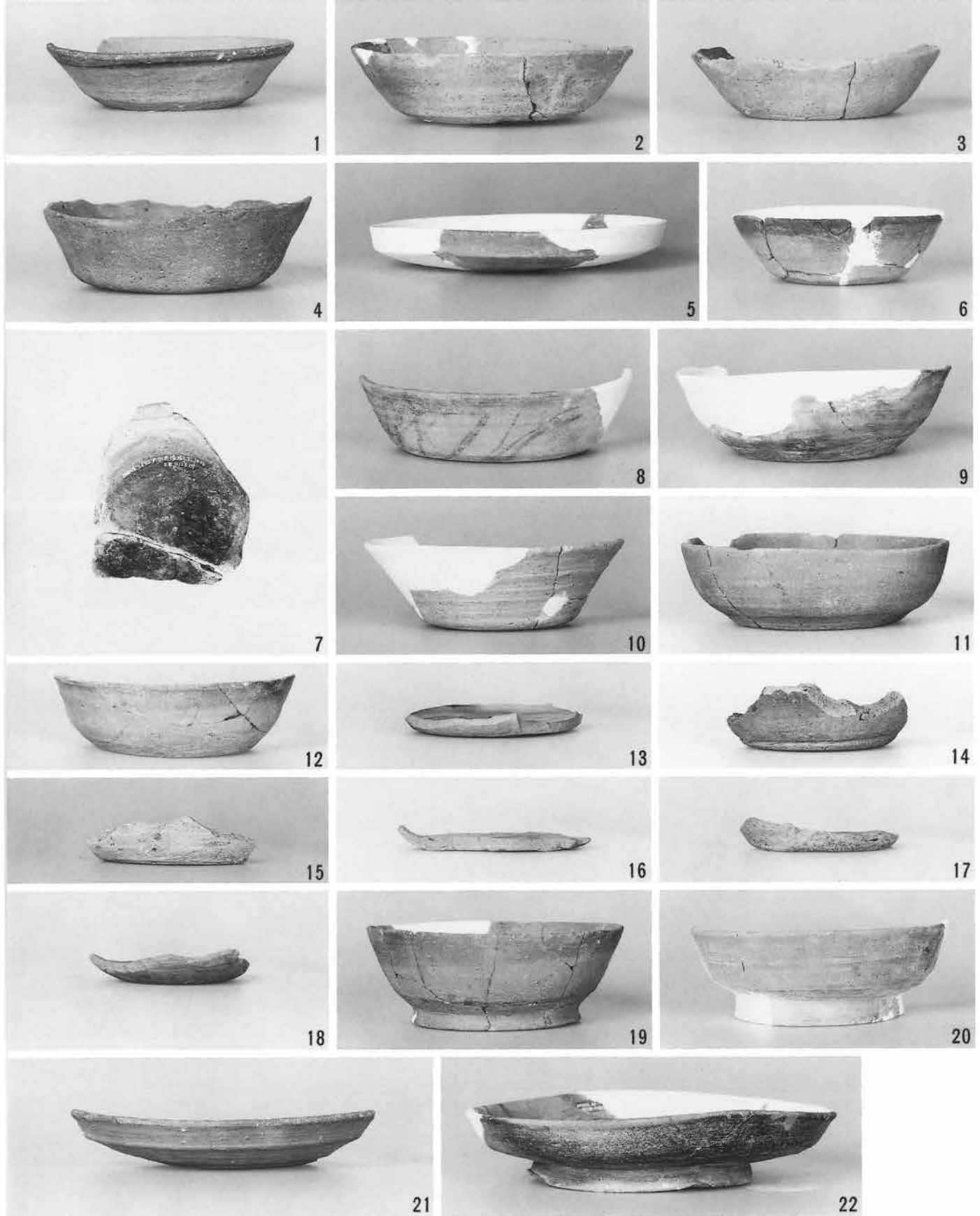


(B9696)

SK103 土壇
(南から)



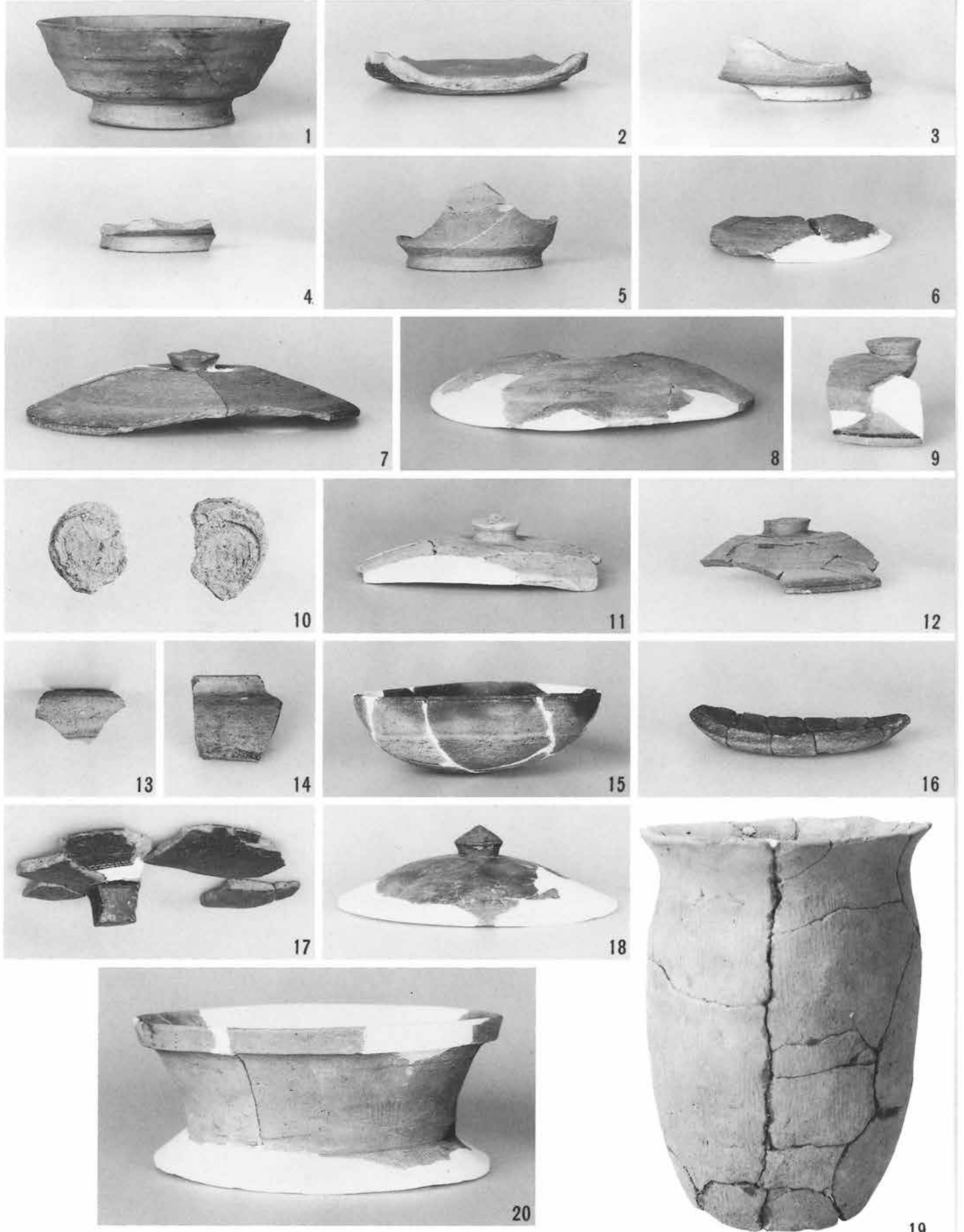
(B9719)



図版8 出土遺物(1) 須恵器

1~7: S I 99 竪穴住居跡 8~10・19・21: S I 100 竪穴住居跡 11: S I 101 竪穴住居跡
12~15・20・22: S K 103 土壌 16~18: 表土

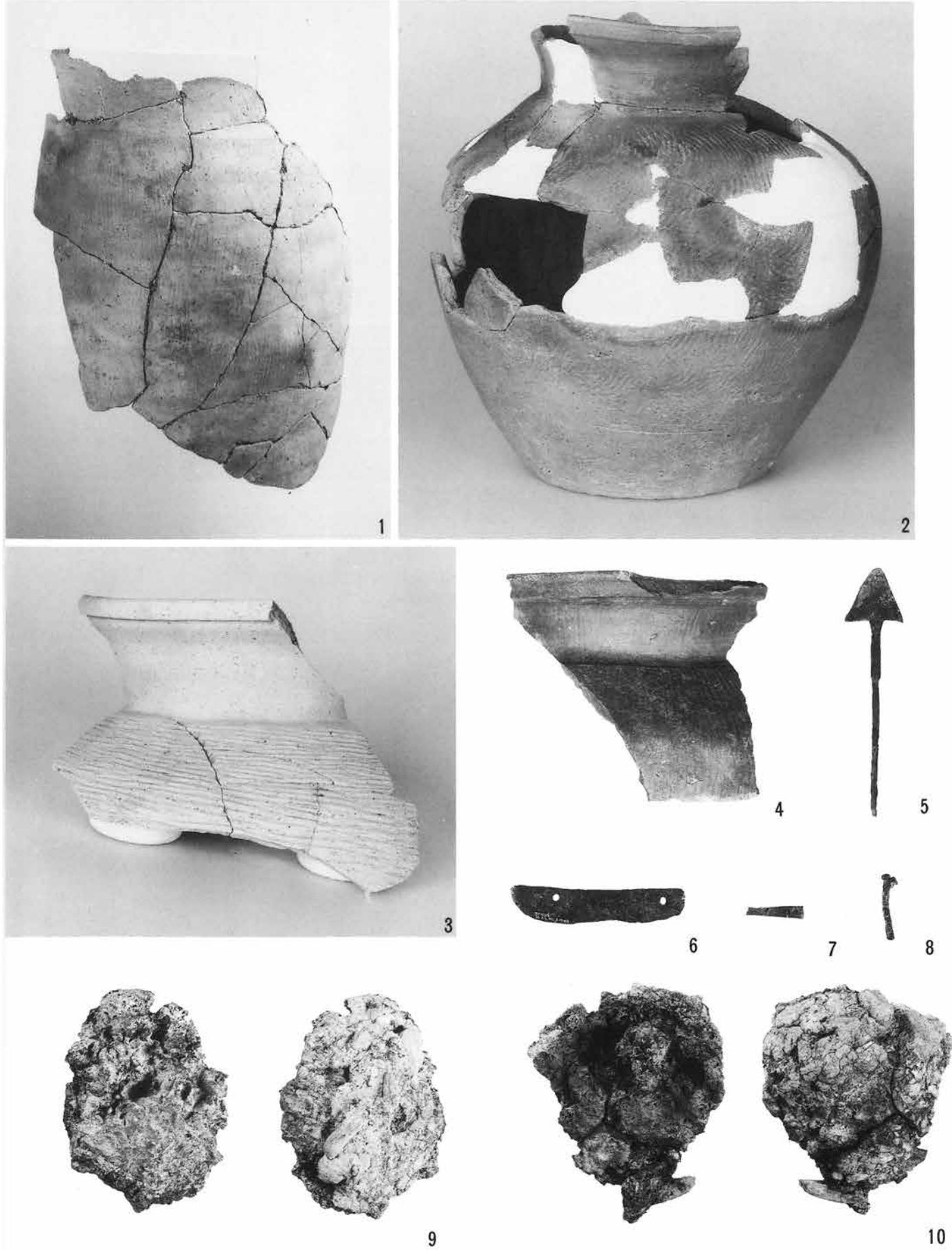
1~18. 須恵器坏 1(第7図1, B10240) 2(第7図2, B10235) 3(第7図3, B10238) 4(第7図4, B10237)
5(第7図5, B10236) 6(第7図6, B10234) 7漆パレット(第7図7, B10241) 8(第10図1, B10247)
9(第10図2, B10246) 10(第10図3, B10244) 11(第12図1, B10253) 12(第14図1, B10256)
13(第14図2, B10257) 14(第14図3, B10258) 15(第14図4, B10259) 16(第15図2, B10273)
17(第15図3, B10275) 18(第15図4, B10274) 19・20. 須恵器高台坏 19(第10図4, B10245)
20(第14図6, B10260) 21・22. 須恵器高台付皿 21(第10図5, B10248) 22(第14図5, B10262)



図版9 出土遺物(2) 須恵器・土師器

1~11・17・18: SK103土壌 12~14:表土 15: S I 99竪穴住居跡 16・19・20: S I 100竪穴住居跡

- 1~5. 須恵器高台杯 1(第14図7, B10261) 2(第14図8, B10265) 3(第14図9, B10266)
 4(第14図10, B10264) 5(第14図11, B10263) 6(第12図2, B10254) 7(第14図13, B10267)
 8(第14図15, B10268) 9(第14図16, B10269) 10(第14図12, B10255) 11(第14図14, B10270)
 12(第15図5, B10276) 13(第15図6, B10277) 14(第15図7, B10278) 15・16土師器坏 15(第7図8, B10239)
 16(第10図6, B10249) 17. 土師器脚付皿(第14図17, B10272) 18. 土師器蓋(第14図18, B10271)
 19. 土師器甕(第10図9, B10252) 20. 須恵器甕(第10図7, B10251)



図版10 出土遺物(3) 土師器・須恵器・鉄製品・鉄滓

1・2・5・7 : S I 99 竪穴住居跡 3 : S I 100 竪穴住居跡 4 : 表土 6・9・10 : S I 101 竪穴住居跡 8 : P108

1. 土師器甕(第7図9, B10242) 2~4. 須恵器甕 2(第7図10, B10243) 3(第10図8, B10250)
 4(第15図8, B10279) 5 鉄鏃(第8図4, B10291) 6 手鎌(第12図7, B10292) 7 刀子(第8図5, B10293)
 8 角釘?(B10293) 9・10 鉄滓 9(B10294・B10295) 10(B10294・B10295)



図版11 出土遺物(4) 石製品・縄文土器・石器・陶器・鉄製品・古銭

1~3 : S I 99 竪穴住居跡 4 : S I 100 竪穴住居跡 5~8 : S I 101 竪穴住居跡 9・10 : 表土
11 : S B 96 建物跡 P9 12・13 : P110 14 : P108

1~7・9. 砥石 1(第8図1, B10284) 2(第8図2, B10287) 3(第8図3, B10286) 4(第10図10, B10285)
5(第12図3, B10283) 6(第12図5, B10281) 7(第12図4, B10288) 9(第15図9, B10282)
8. 石製支脚(第12図6, B10289) 10. 縄文土器(第15図1, B10280) 11. 石鏃(第4図1, B10290) 12. 陶器(B10298)
13. 古銭・角釘(B10296) 14. 古銭(B10297)

多賀城関連遺跡発掘調査報告書第23冊
桃生城跡 VI

平成10年3月25日印刷
平成10年3月31日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市浮島字宮前133
TEL.(022)368-0101
印刷所 東杜印刷株式会社
